

ちねあやめ

あなはな

初え

上の

あな

ういん

形りゆき

とりのとら

吟詩考板

居のま

昨年さきとしの秋あき我が東京新聞とうきょうしんぶんの
 扉かぶを述のたまへて載ませし
 於お於お於おの履歴らんれきの小生せうせいが親おや々々見聞けんぶんせし近世きんせいの奇談きだんあるを
 一時紙上いちじじやうの掲かげのふりて其終そのまに於おりお久ひさい寔まこと小物せうぶつの
 物語ものがたりと地口ぢぐちの所ところへ誂あやひ通とほり島鮮堂しませんどうの主人しゅじんが訪来ほうらいして然しか其事そのこと幸さいひ
 今年ことし辰しんの年とし池いけの大蛇おほいづま小因せういんあり巴浦あまのうら長者ちやうぢやの故事こじを爰こゝ温あたたねて新あたらし
 しく當時たうじ流行りやう乃すなはち合卷あひまきに綴つづりてとをいひ此方こゝと望のぞむ所ところと起泉子おきいづみこの夜延よのひを
 かきあて三編さんぺんに記縮きしゆくめたる草稿そうごうの校正けうせい方かたと画割えがわりの手傳てづかを引受ひきうけ、此編この編
 は発端はつたんある埼玉さいたまの尾崎おしざきが池いけに程近ほどちかき忍しのの行田ゆきだで生なま

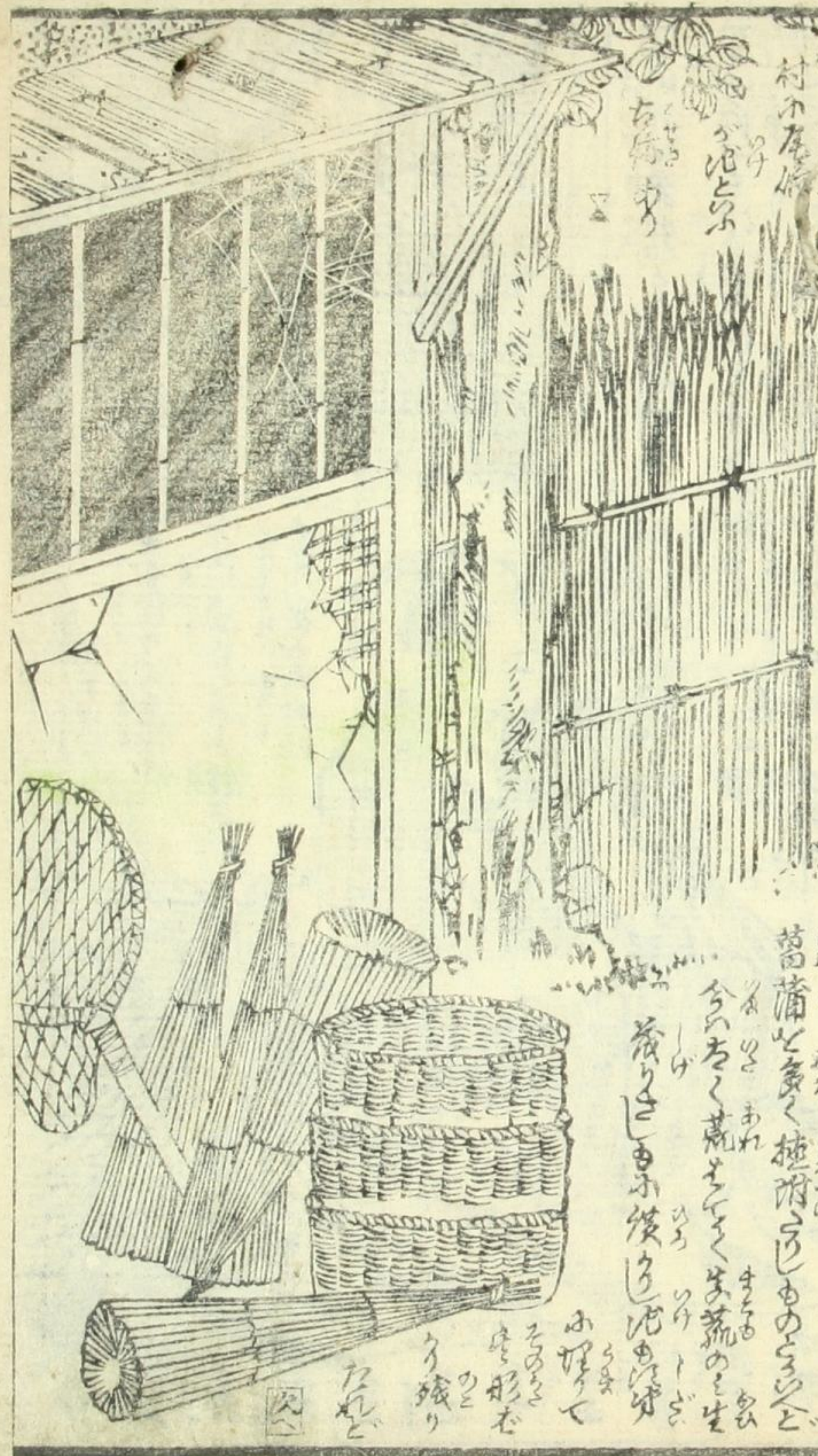


明治十三辰春

芳川俊雄







登端 武蔵國 傳 家 長 菅 蒲 長 老 藤 崎 五郎 崎玉

村 不 在 傳 右 傳 中 右 傳 中 右 傳 中

菅 蒲 之 長 老 藤 崎 五郎 崎玉 之 傳 家 長 菅 蒲 長 老 藤 崎 五郎 崎玉

小 形 之 物 之 形 之 物 之 形 之 物



己之助父 赤城市十郎

白 善 神 也

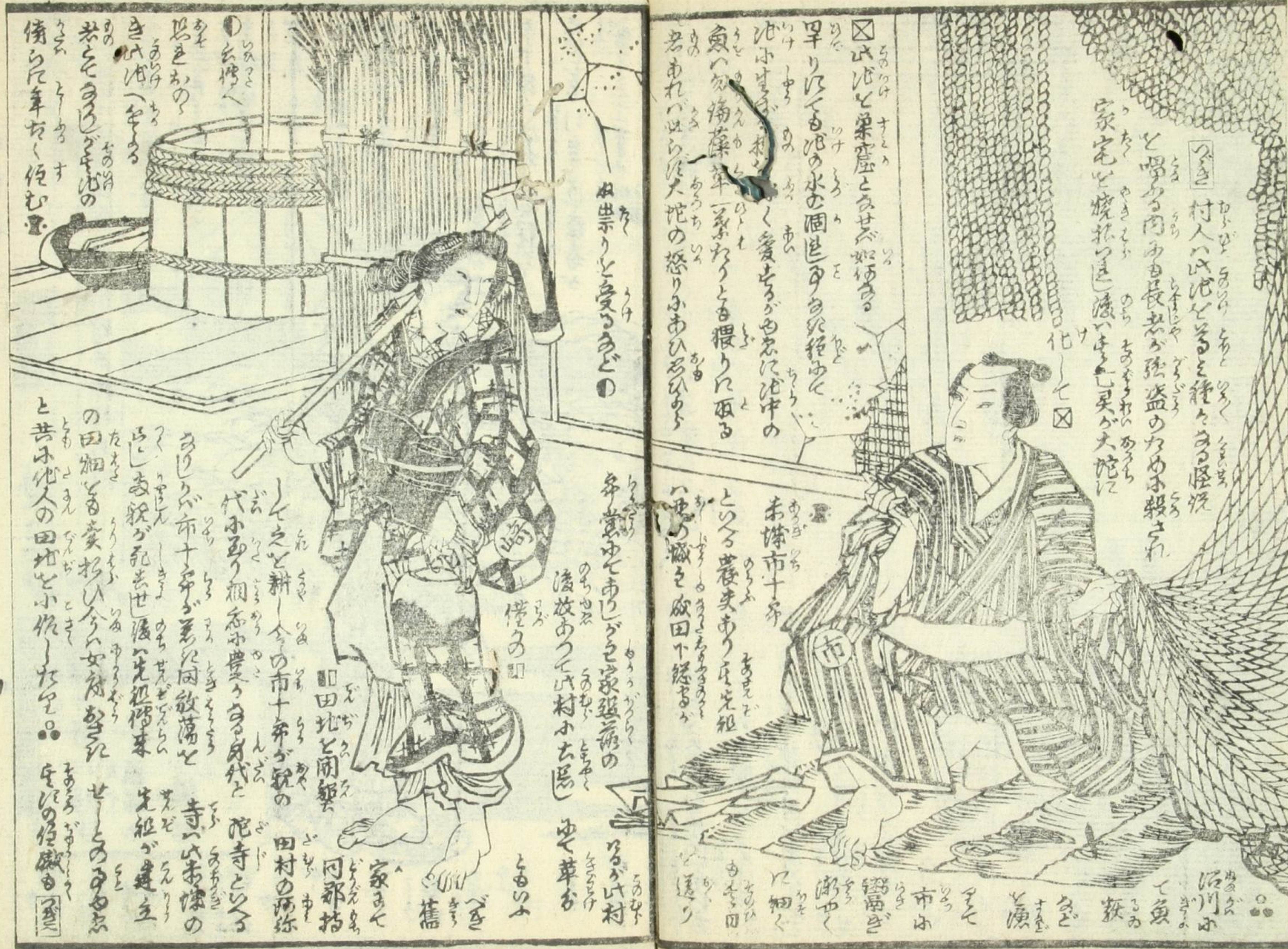
村人の以池を多と種々なる怪談
と唱ふる内も長老が強盗のため小殺され
家宅を焼払つては後いまだし更か大蛇に

以池と築屋とを其如く
早りにて池の水を個にすむ終め
池にすまふ村人く愛するがゆゑに池中の
魚へ勿論藤草一系たうとも覆りて取る
若かれははらば大蛇の怒りふあひひひひ

未時市十糸
とける養父ありて先組
ハ池の底を破田下総者

以池と築屋とを其如く
早りにて池の水を個にすむ終め
池にすまふ村人く愛するがゆゑに池中の
魚へ勿論藤草一系たうとも覆りて取る
若かれははらば大蛇の怒りふあひひひひ

田畑と開墾
田村の西縁
寺に以赤煉の
先組が建立
と昔小作人の田地を小作したる品



ついで疎多

從是南 武州崎玉郡崎玉村

市十部又歸が安芸

と政色を如何も由て

先祖が園地田地と

買戻して

たしとあると所跡

池をこそも是を檀

家ゆゑに賣ちされ

室を亦に世に亦も

市十部に以て利に

世に引受て居る者

都て二十一年の時



此所に何
を今画様の
記に二編に
くする

④ 未
うら
き女
何
毒
競
の
乃
か

大橋と好ひ所跡

のため男根と切斷

と跡をて今状へ

世に男根の

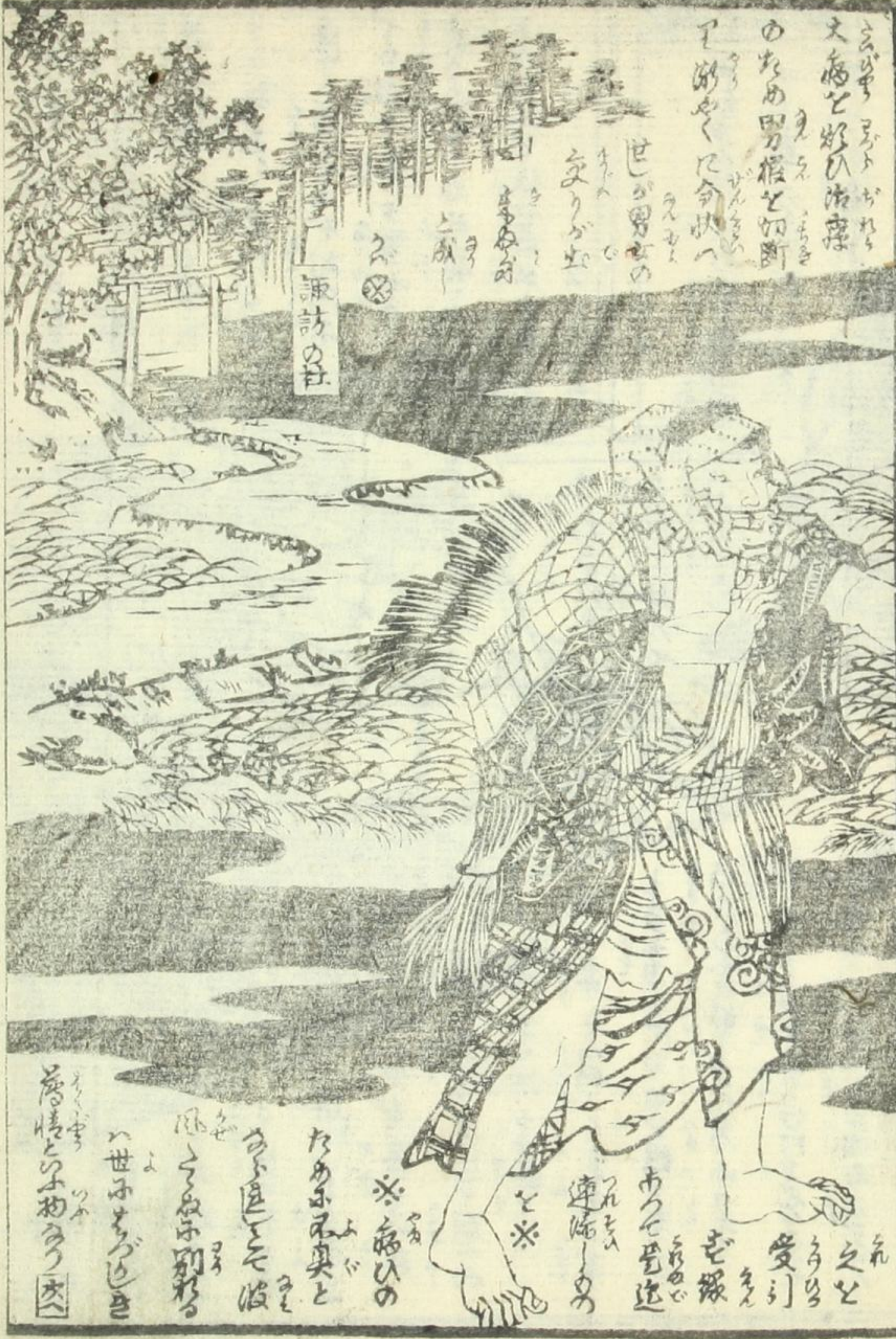
交りか

まゝ

と成

ふ

諏訪の社



※ 病ひの

ためふ不奥と

あはてて波

風

ハ世ふまづはき

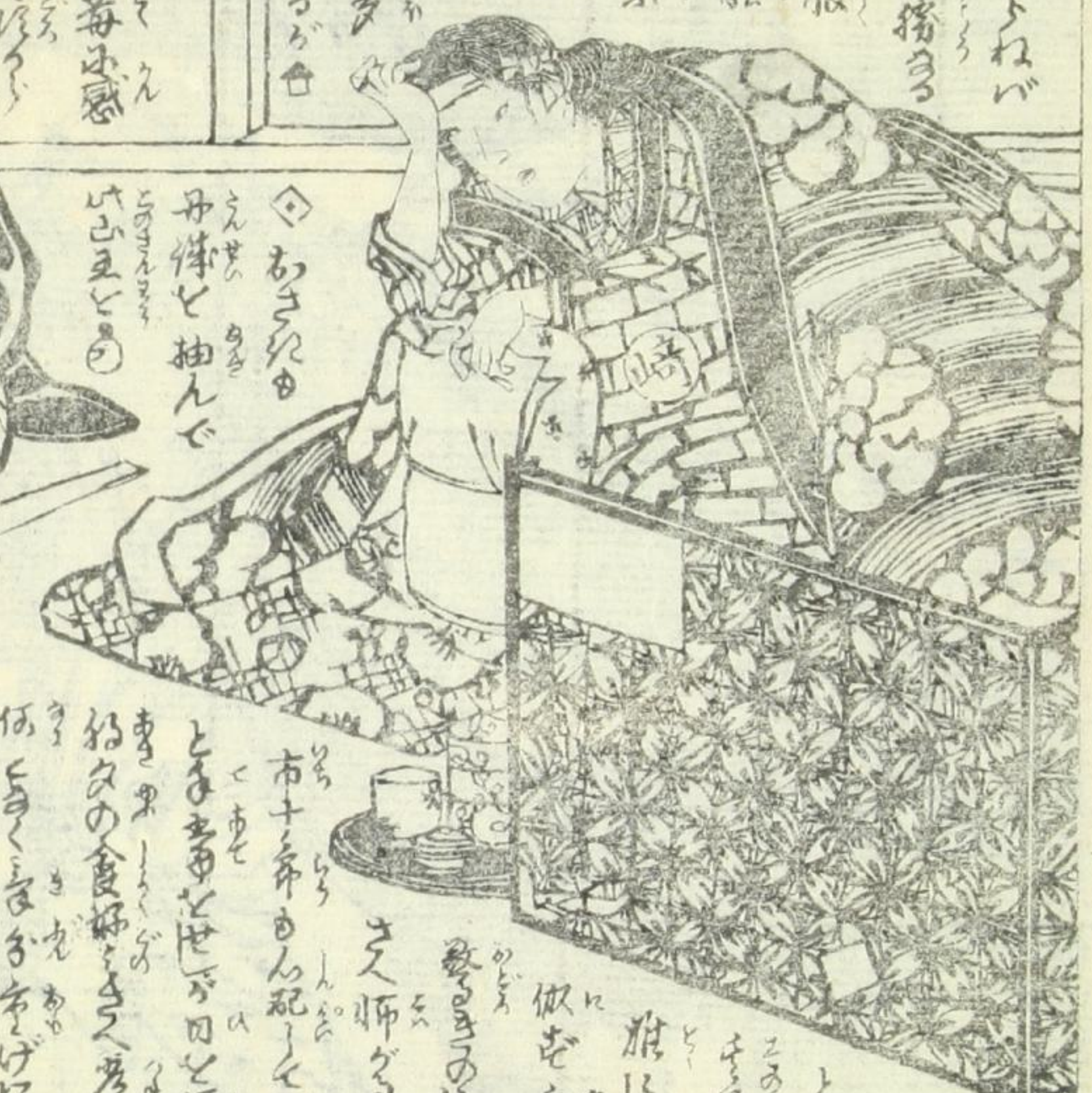
層情とよ物まづ文

妻を厭つてあつたねい
 かつとも活運はしてと殊務多
 換授市十糸女家服
 しておきと後いと腫
 ほく着まふぞ村内小
 ても市十糸が男女の
 変りのあつた不具と
 あつたのと伝せぬ者も多
 くりりか

白鳥のあつた不具と
 せし事ありや日経
 帯下の病いふ

恨むが故
 け村
 二里行
 随つて次村といふ小
 紀とて山王の村ハ
 婦人の去病と

癒を更詮
 あつた事ハ



丹律と抽んで
 けいま

市十糸の女に
 何となくまをせに名をいふ
 市十糸の女と痛めをいふ
 市十糸の女に
 何となくまをせに名をいふ
 市十糸の女と痛めをいふ
 市十糸の女に
 何となくまをせに名をいふ
 市十糸の女と痛めをいふ



月の内
 或日参詣の途中
 恨むとてを夜いりも

痛治の仕振由ありと
 恨むとてを夜いりも

市十糸の夜とあはす
我不具多と知れぬ
故形を診断遠いと
白世三つ

かかまはか
後の日と
追て隠す
振へ
服儲
あとのつゝ病ひ
あてのりたると又も
心痛とほしうが
まといあはる事あり



過つる夜あり
心身と一通りせ
今由

久しく月ののどとえぬか医者の
診断の通り懐妊せし事々様々
あつた如何小せん何とまに云はせんと
あひ屋して今さうに病も入らぬの内
種々ユエと運じて或四
まに病る事々々の今後の
病状は河はさんのお診断の
通り懐妊とあは四月糸々
月候も元次糸にわ腹もき
まり月分多も糸候とのと
合点やうねど何事も病のため
と星宿のお吐いやさげやう
たかき糸のお難ひと晴さんまに全



歸一之
抹
毛
の

つぎ 坊の例も世にありの如き燈火の影に伴ふ人の影
 羨望を多くくくるとて村屋の共共人ぬゆり
 さふ惟ちと似た打笑うまの指紐
 池く遊とより疑意の後解く可あり
 必らびとも不致るくは我の世の世に居る所
 が泥のあなれ白骨のそと海めたる

萬歳
 長考
 我再び
 世に生と
 ぬんとぬぬ

か撮と假るべき
 女子のあはれ若くむ
 折りかぬる心く思ふの
 交りて断ちけは身清浄なる
 のときんば生家の紙小園とも
 あれは誓一の苦痛
 と忍び紙をか
 と返さるやよと
 夜具の上小踏か
 りら香やあま
 かり妻言中一
 温うれ物と投ぬ
 まつを翻くをよと見えが

の大地とより納戸の窓の破る
 や産後一春後の因

天保四年



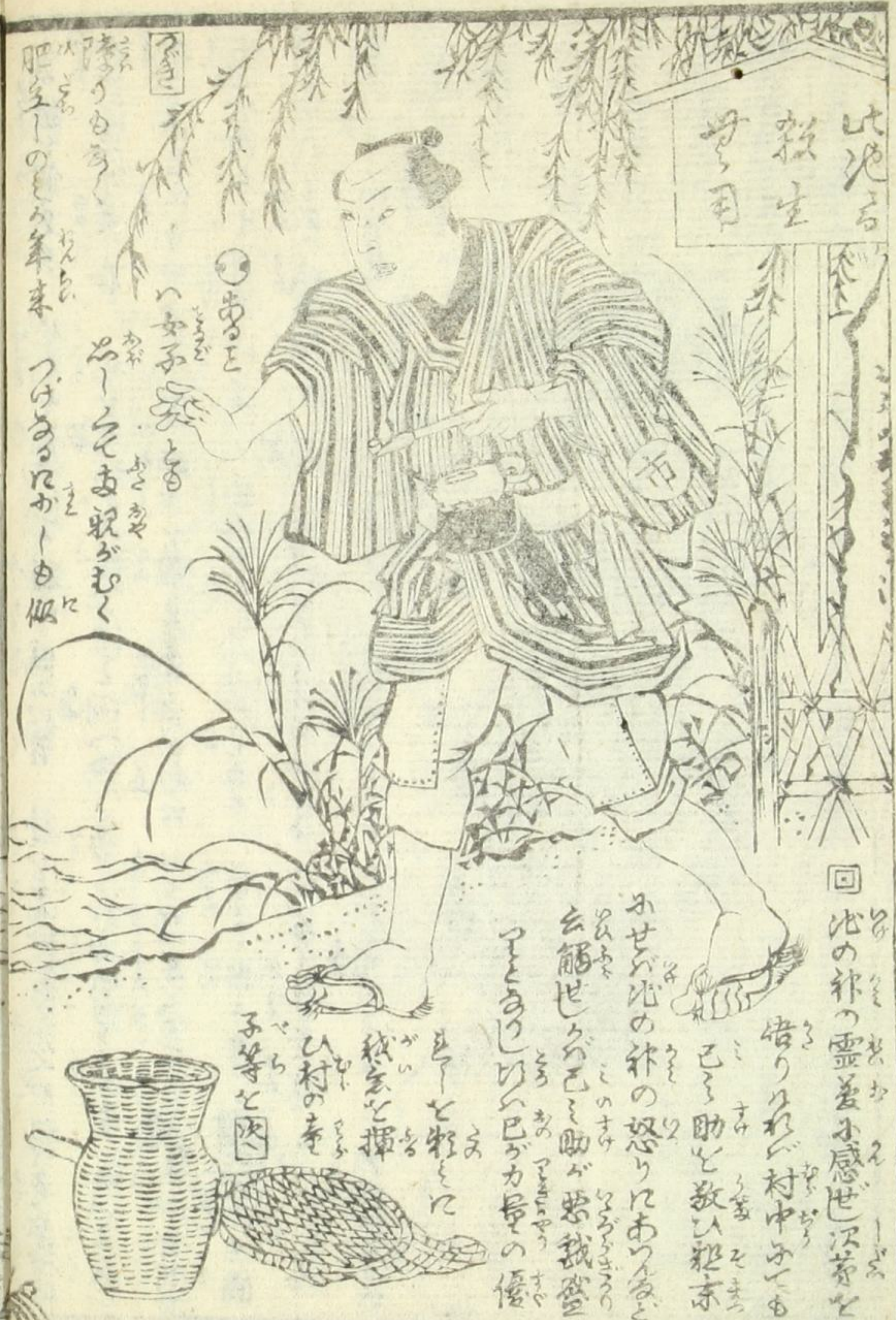
か撮と假るべき
 女子のあはれ若くむ
 折りかぬる心く思ふの
 交りて断ちけは身清浄なる
 のときんば生家の紙小園とも
 あれは誓一の苦痛
 と忍び紙をか
 と返さるやよと
 夜具の上小踏か
 りら香やあま
 かり妻言中一
 温うれ物と投ぬ
 まつを翻くをよと見えが

の大地とより納戸の窓の破る
 や産後一春後の因

天保四年



比地 救生 月



回 比地の霊は小感世は春を

借りて村中か

己の助と教い知未

かせ比の村の怒りにあつて

云能せよ己の助が救世

子等と

杖を揮

ひ村の

子等と

肥土の... 肥土の... 肥土の...

あつて... あつて... あつて...

あつて... あつて... あつて...

あつて... あつて... あつて...

あつて... あつて... あつて...

あつて... あつて... あつて...

あつて... あつて... あつて...



惚と帯の... 惚と帯の... 惚と帯の...

惚と帯の... 惚と帯の... 惚と帯の...

惚と帯の... 惚と帯の... 惚と帯の...

惚と帯の... 惚と帯の... 惚と帯の...

惚と帯の... 惚と帯の... 惚と帯の...

惚と帯の... 惚と帯の... 惚と帯の...

惚と帯の... 惚と帯の... 惚と帯の...

芳川春傳岡本起泉綴

其名し高橋 東京奇聞 七編 色吉原安兵衛御捕 三冊

毒婦之阿傳 東京奇聞 七編 色吉原安兵衛御捕 三冊

嶋田一郎梅雨日記 五編 東京奇聞 七編 色吉原安兵衛御捕 三冊

白菅阿繁顛末 三編 御所櫻梅松録 十編

坂東彦三倭一流 三編 昇平之府藤栗毛 三編

澤村田之助曙草紙 五編 新板物不殺海心

幻阿竹尊聞書 三編 櫻田祝町二番地 編輯人 岡本勸造

川上行義復讐奇談 二編 出板人 綱島龍吉

白書

つぎ 悩ますの夜々あてぬれも持ぬ
 せねまりが十二三歳の頃より父市十郎
 と共小近所の沼川に釣籠
 などで漁して之を
 市中へ賣揚せし高
 ひも多くなりあり尚ほ
 の魚とゆんををと出せりと思れて
 一人網をいし事多し尾柄が池の中
 あり網をいし事多し尾柄が池の中
 あり網をいし事多し尾柄が池の中



魚の多く捕さるる
 長男がさるる放別後へあはせと
 魚の多く捕さるる
 長男がさるる放別後へあはせと
 魚の多く捕さるる
 長男がさるる放別後へあはせと

中の巻へ

揚州周延画

芳川春涛関
岡本起泉綴



初編中

中
上奥
井屋

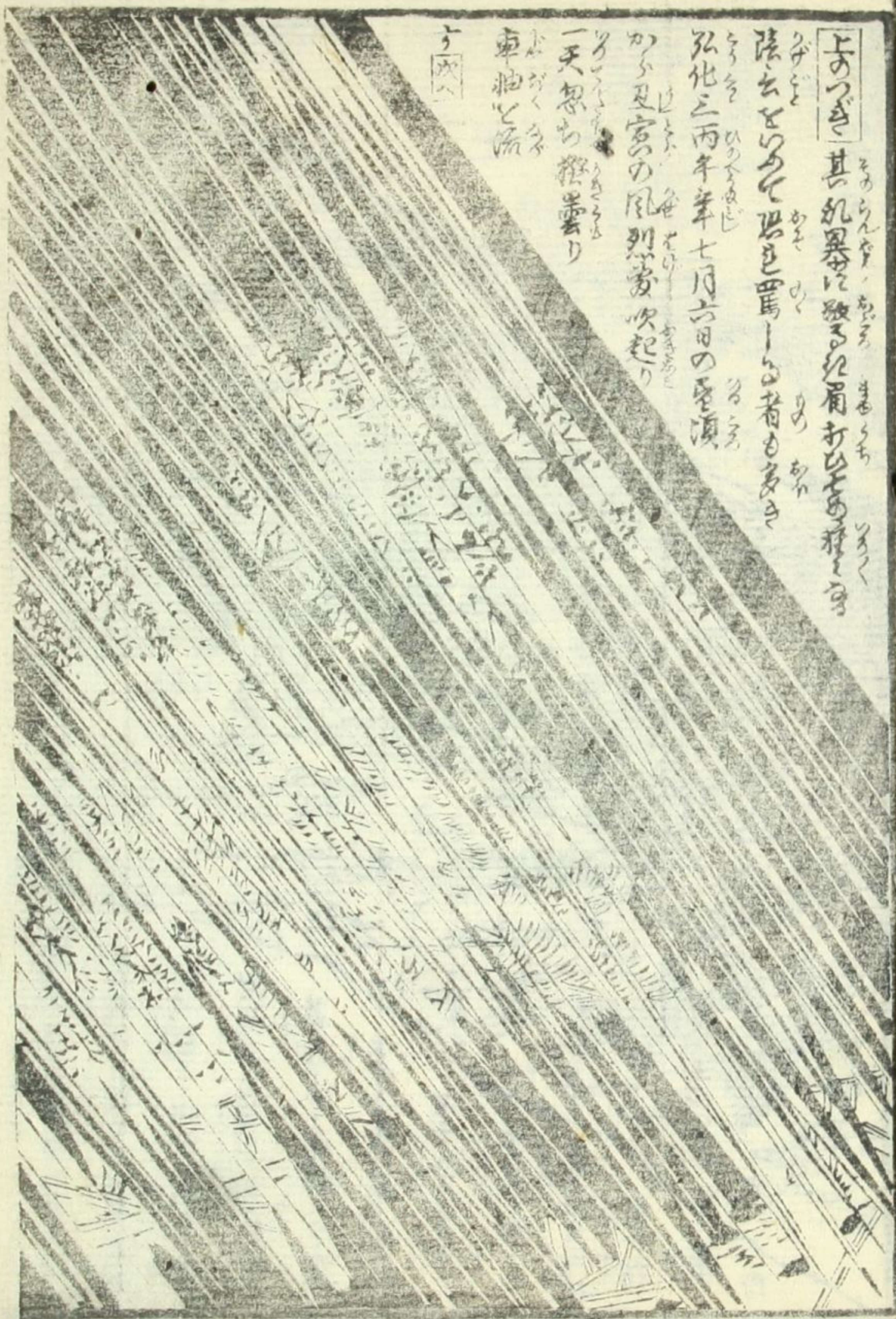


花あやめ

花あやめ

花あやめ

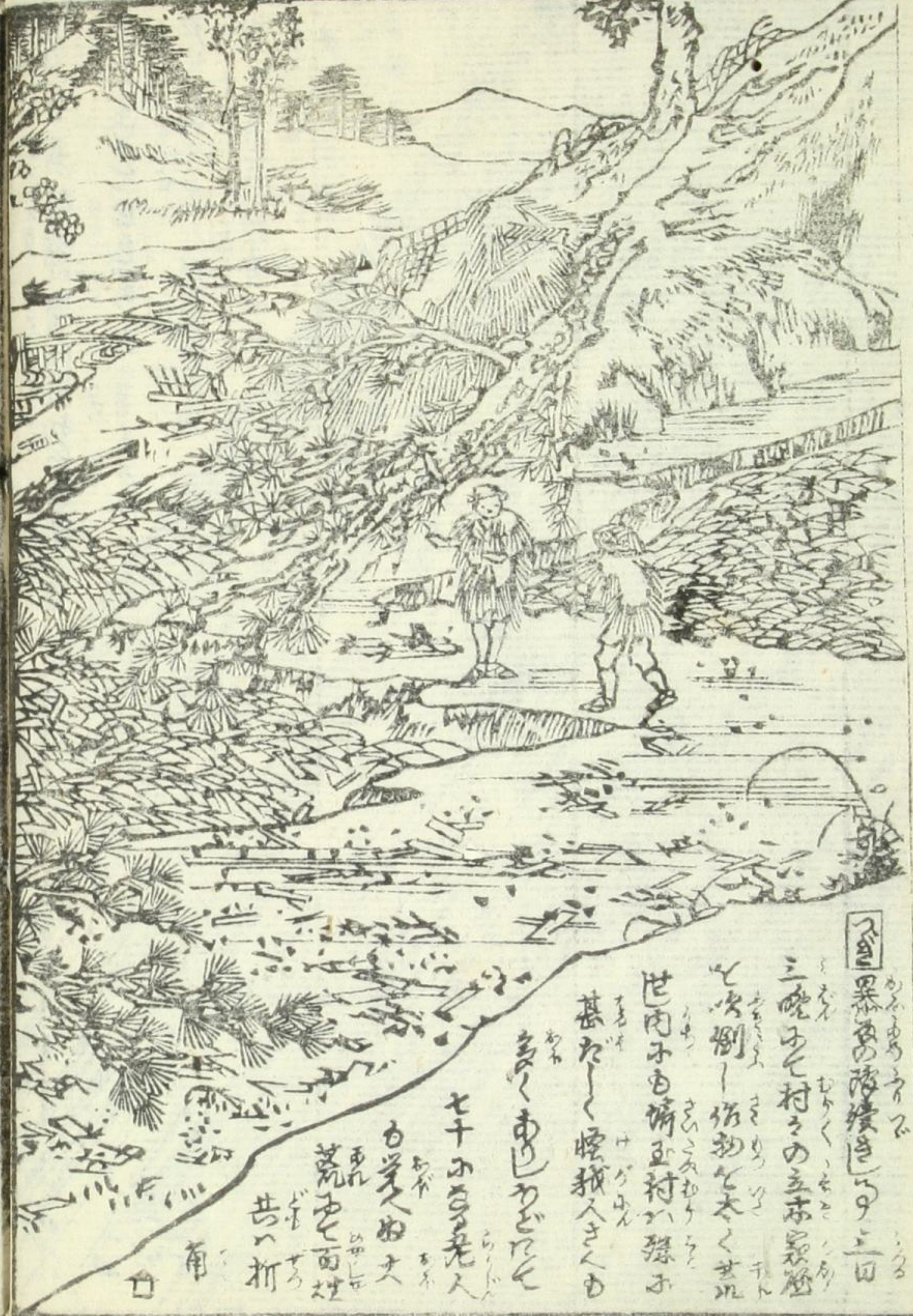
花あやめ



よつぎ 其れ異に... 弘化三丙年七月六日の巻頭... 天忽ち雲り... 車軸と流...



赤城の宅
 尾崎ヶ池
 稲俵
 収納
 道
 巴



黒色の海濱
 三嶋の村々の立本
 七十年前の老人
 由受人の大
 荒れに面
 共打
 甚だしく懐我入さる
 多く東に
 世内亦も情玉村の孫子

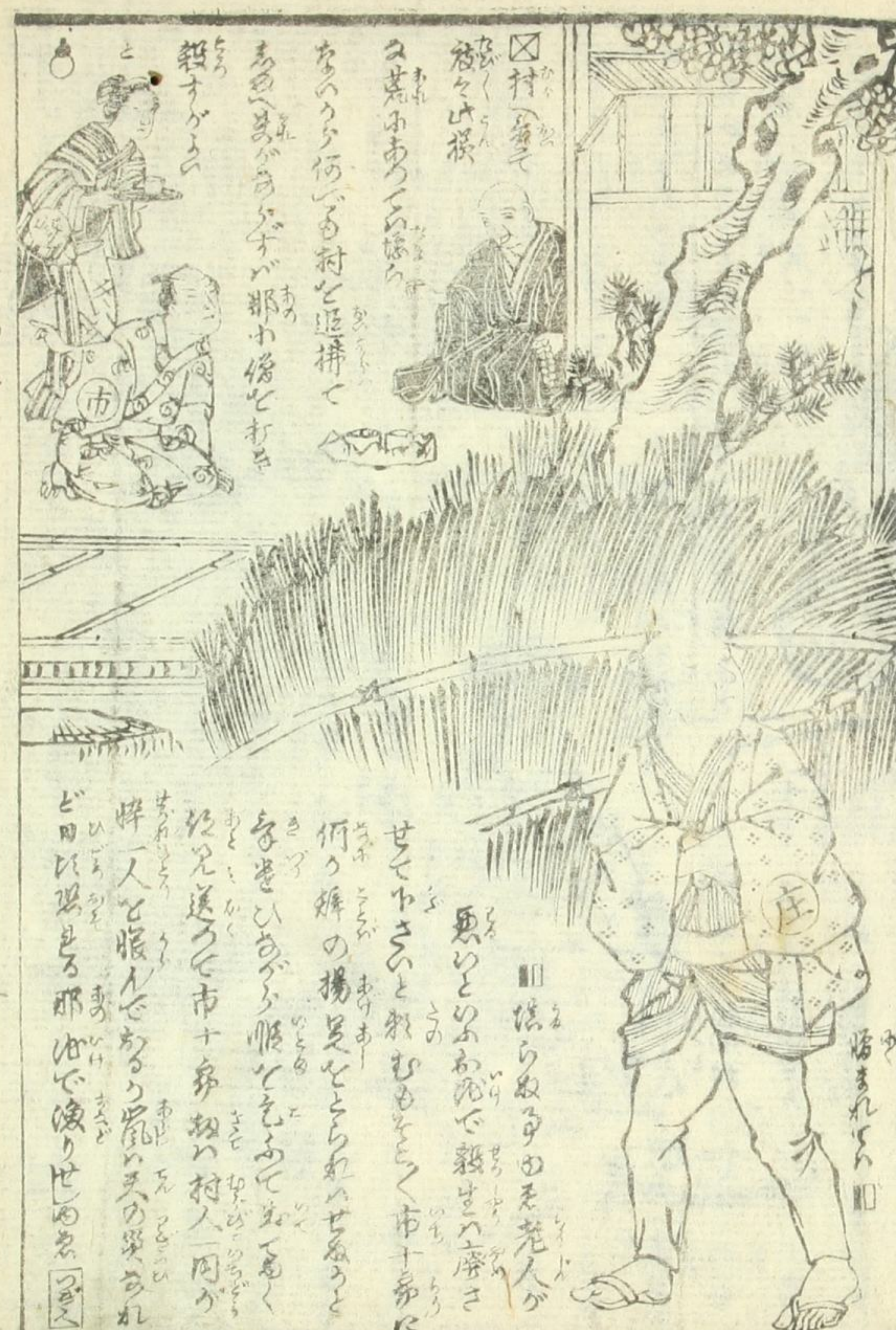
つぎ城のすまゝにこれ程春の大抵吹削され路既も迷ふ共も
 多きふも不依ありて市十希の宅をうり九のちの換下も
 まきより村人の庄を後に打



より今後の大
 嵐の常り
 受ぬ全くこし助が
 村の枝を破つてお池を
 荒し之崇とあらう郡子信が沈みぬの
 生まがらうさかみ換おとりのある若らぬが
 レテのふと何の子づる知れぬとてふ

〇相成を植て
 法をともりて
 出小法屋も換
 こあんと沸く
 己の助を借るや
 くらひ赤澤の家
 高河を究るも

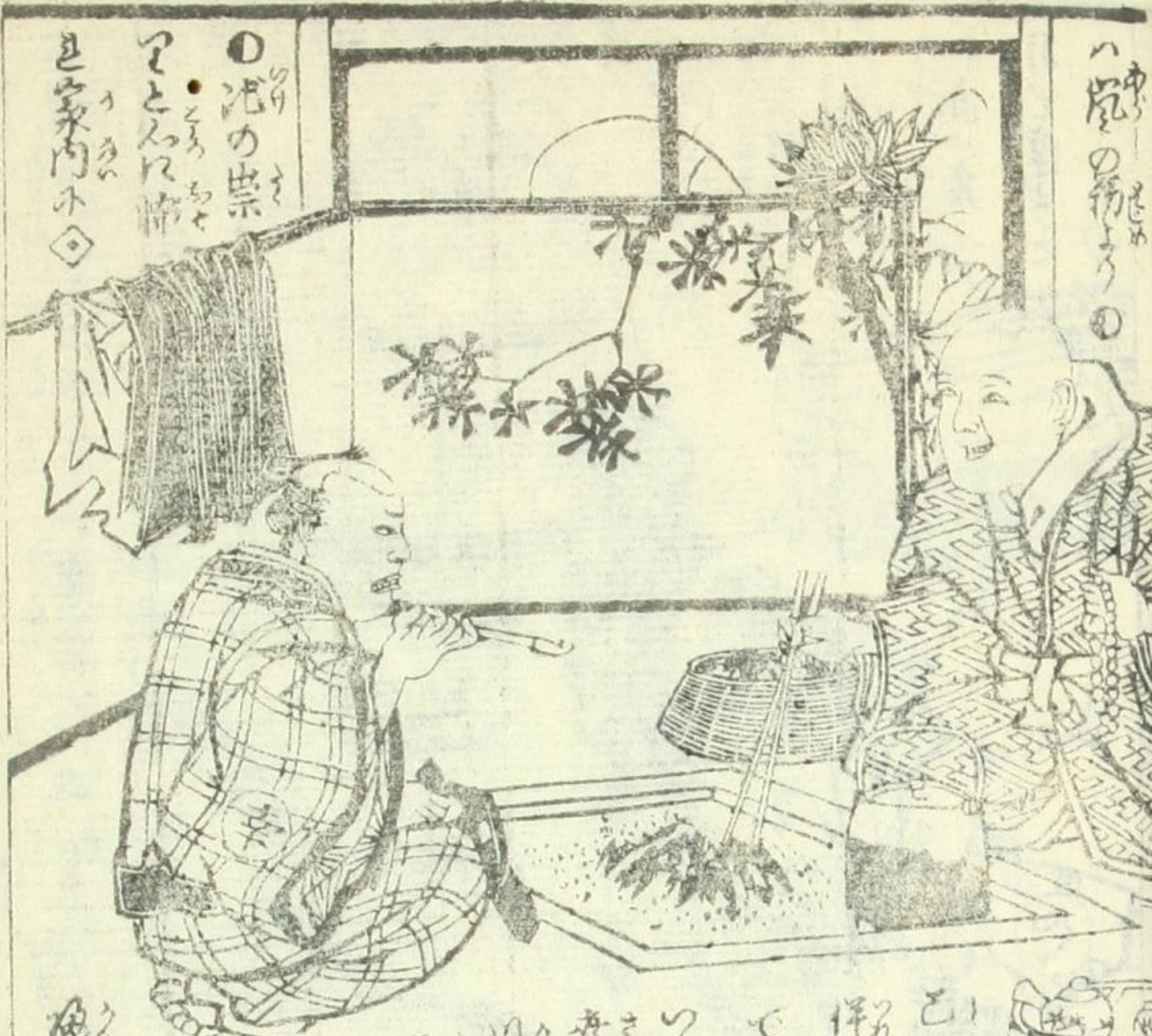
▲當村草分の四者あるふ若る
 〇此程村もあはれ逃散
 出草ねと古くより云傳へ
 〇村の枝を破つてこの助へ
 〇松を植て
 〇法をともりて
 〇出小法屋も換
 〇こあんと沸く
 〇己の助を借るや
 〇くらひ赤澤の家
 〇高河を究るも



〇村の枝を破つてお池を
 荒し之崇とあらう郡子信が沈みぬの
 生まがらうさかみ換おとりのある若らぬが
 レテのふと何の子づる知れぬとてふ

〇相成を植て
 法をともりて
 出小法屋も換
 こあんと沸く
 己の助を借るや
 くらひ赤澤の家
 高河を究るも

〇此程村もあはれ逃散
 出草ねと古くより云傳へ
 〇村の枝を破つてこの助へ
 〇松を植て
 〇法をともりて
 〇出小法屋も換
 〇こあんと沸く
 〇己の助を借るや
 〇くらひ赤澤の家
 〇高河を究るも

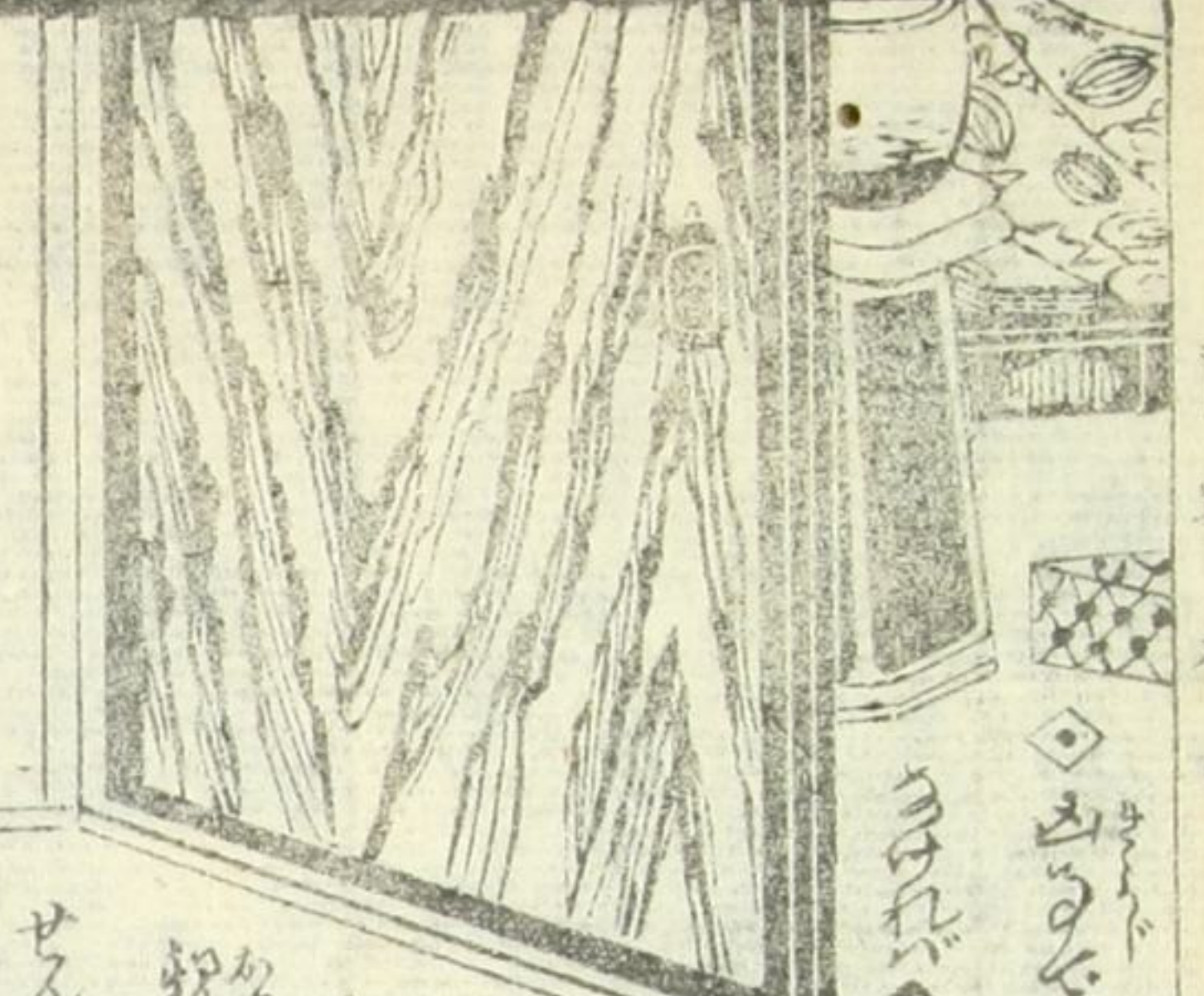


○池の祟
 ととらぬ怖
 屋敷内小

ハ花の傍より

はたしと寄りかへ
 めんまをひ
 ぞとらぬ怖
 屋敷内小

はたしと寄りかへ
 めんまをひ
 むしとらぬ怖
 屋敷内小



山崎の
 こぼれ

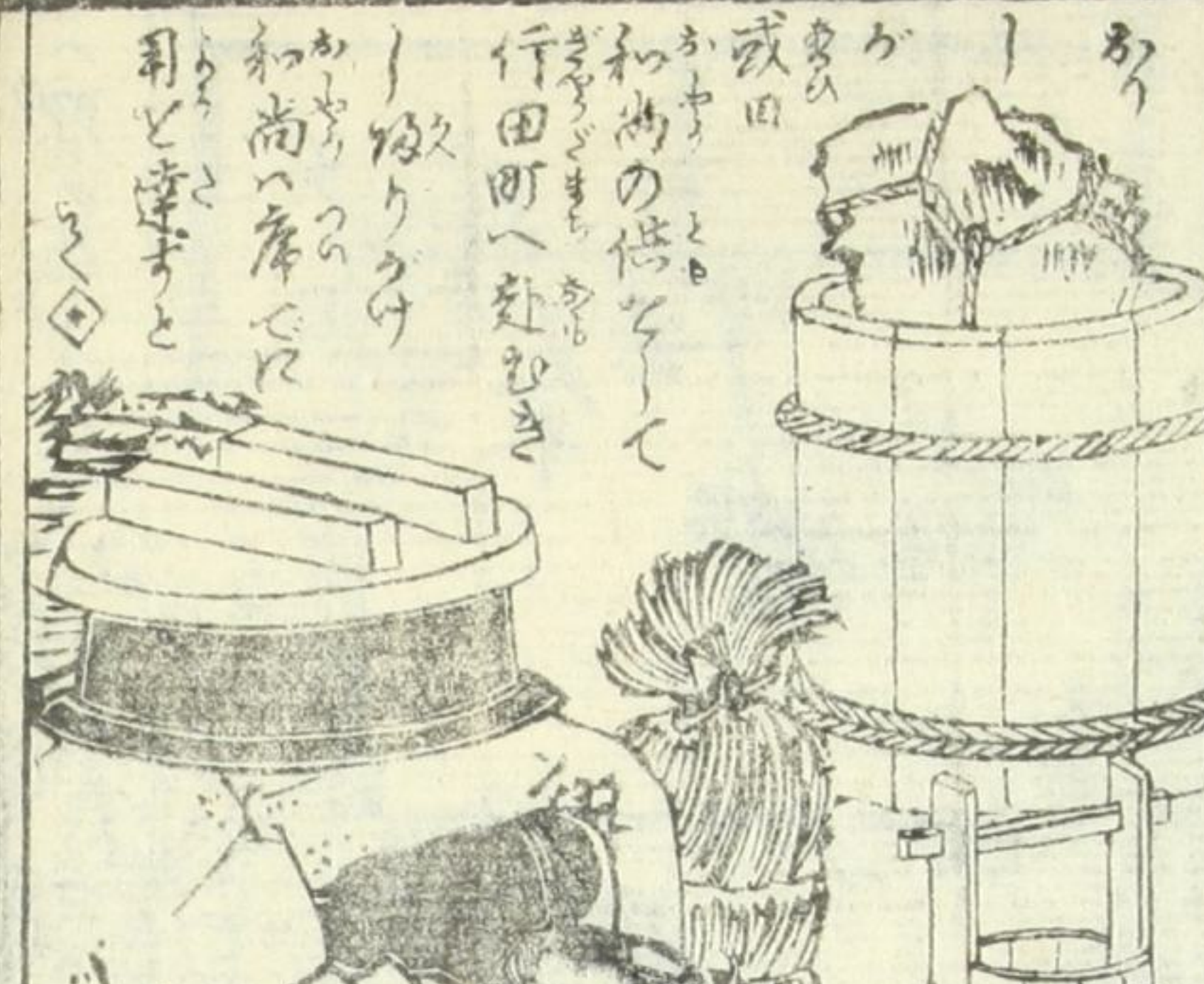
おきまめとふの
 を理とあめしと倫
 て肯ぬる底とも底を
 下めかき量えり困
 つのものと相あふ

△あいつとあいつと
 店屋が精を一々おた
 りつとあいつのけきも
 のさふこも助の侍も
 こふもあふ悔て返らぬ
 めまうとふぬおほ
 親の免や
 せん角と
 まねのせい
 小頼と集めて相候の
 才一花の元舞ふと

△あいつとあいつと
 店屋が精を一々おた
 りつとあいつのけきも
 のさふこも助の侍も
 こふもあふ悔て返らぬ
 めまうとふぬおほ
 親の免や
 せん角と
 まねのせい
 小頼と集めて相候の
 才一花の元舞ふと

△あいつとあいつと
 店屋が精を一々おた
 りつとあいつのけきも
 のさふこも助の侍も
 こふもあふ悔て返らぬ
 めまうとふぬおほ
 親の免や
 せん角と
 まねのせい
 小頼と集めて相候の
 才一花の元舞ふと

○ 救世の今いふ度して農業と
みづいせんといふと邑之助の百姓
業と嫌ひ実家へ帰るといふ



○ 知らぬ一人の
曲者か和尚
の指圖

□ 風俗を色と容質
出さぬを相い盜賊
容赦のせぬと有
あふ天孫様
と撥取
く物とも
のさば後
く力に
任せお
例す不意
響るく曲者
そまを不
平富と

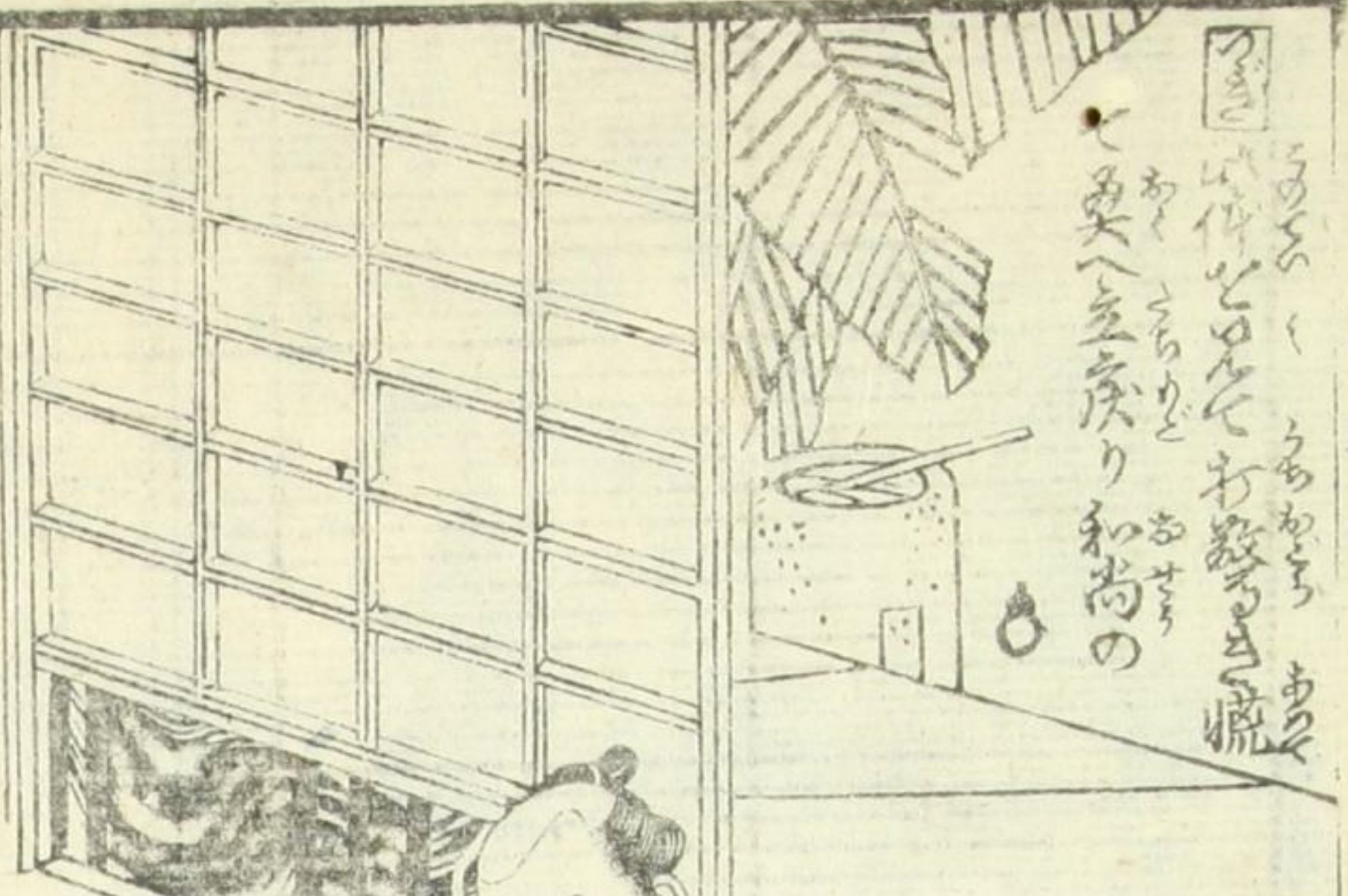


◇ 近所の家へ
まよひる
あてわくとま
戻り見よハ庫
裏の夜だか
あき
見せん
門前の
百姓
拓谷香治が
仮宿の愛と
免一何こと
ありと出
でーが火へ

除くも

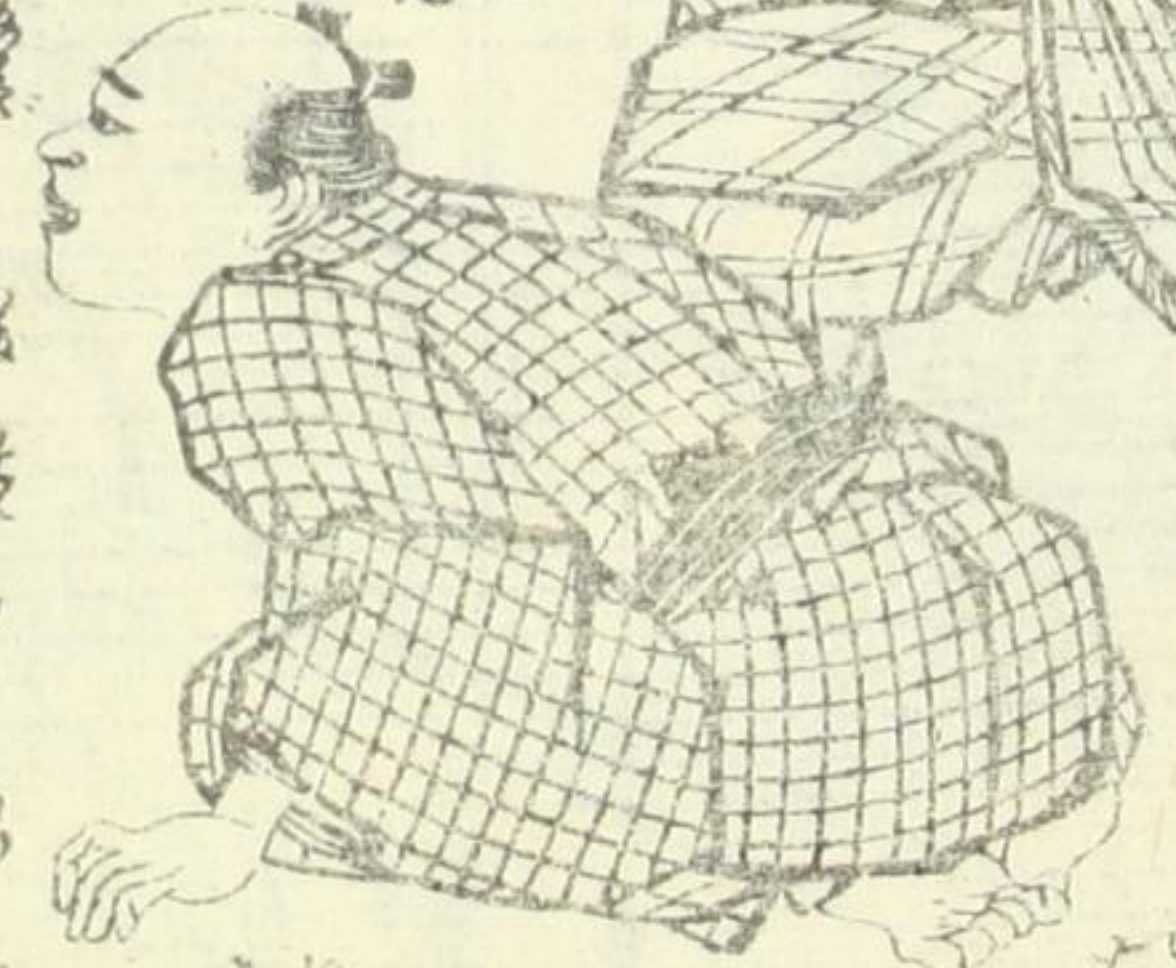
不審く密と様子を伺ふと

ついでに... 阿彌陀佛の
と云へま戻り和尚の



〇活開の細引と持来り
己の財力を合せても誠と

悪まをさせぬや
身と拵れつと夜懸
勤不徒倫一巻流不
云付門前まで送り
おとせられぬ誠の有りては
今の誠が源一拵て病をうつ



〇男の辰もん地より長極とさせしと
おひきかす誠の持出せ風宮の安色を
改め先の所へ納める阿
田下雨示るは蘭芝
雑物の入らるるに
あて八両
と刻の傍
入るる
一か合を
き中ふい
あて八両
と刻の傍
入るる
一か合を
き中ふい

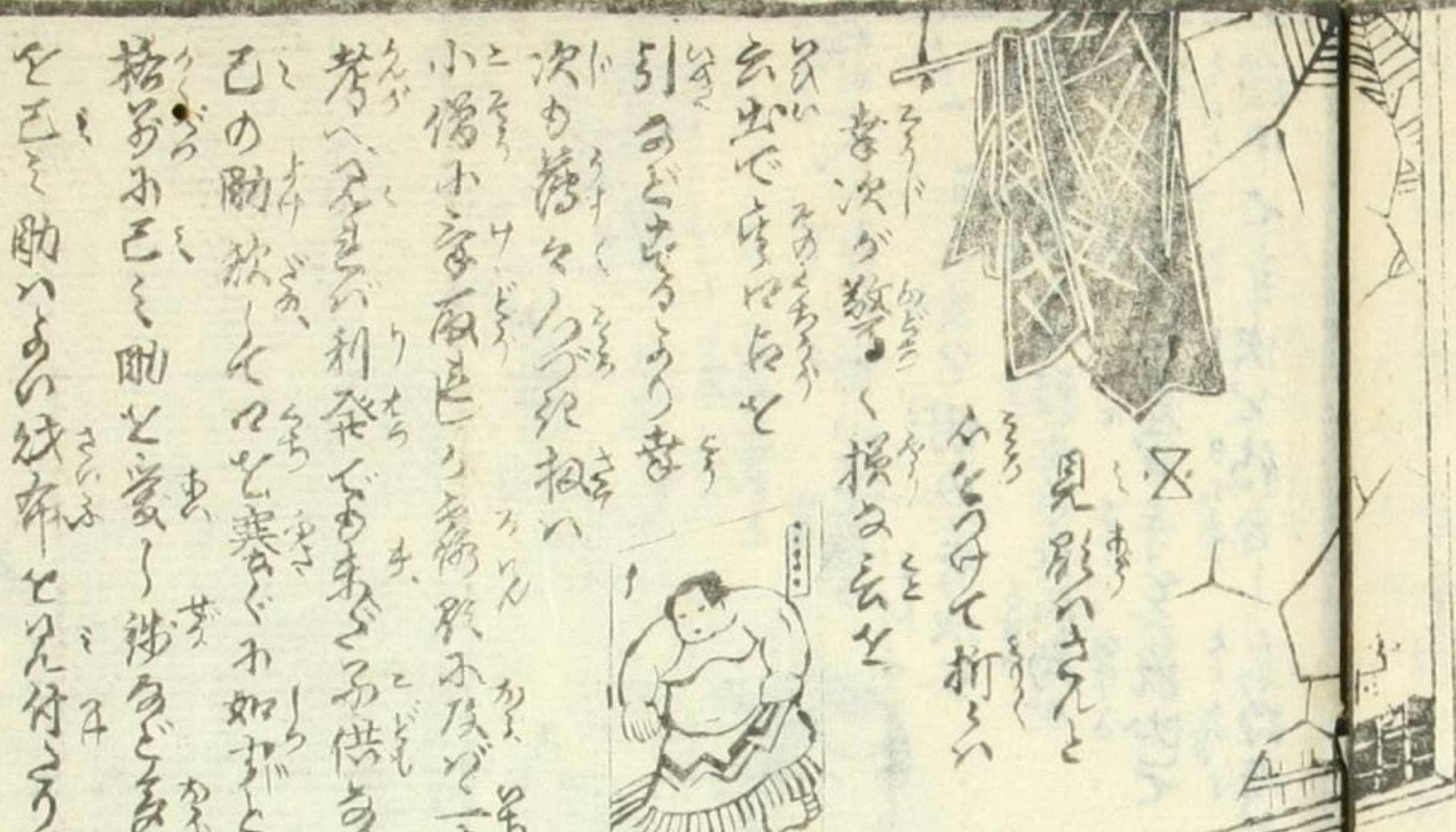
ついでに... 阿彌陀佛の
と云へま戻り和尚の



これ幾まときく伏せ
返すも由勝き奉初と今更悔
是と咎はと和尚の誠を疑ふと己の
助の誠が只後感涙の咽びつ
悔悟の情と云つ世に伏せ考ぐ
盗に物
を拵り
一と云ふ
ねがはれて
懐くは
子ある者
治が次



● 昔次は林文へちまの納の
 ちめ村の孫代めて仔細へ
 出まじり事になられば
 或田乙と助の仔細の
 林姓を借り一交冬文
 事付の旨々の異論あり
 殊小形々の名所を父物
 して世小面向き事
 まうと因て乙の娘が
 頼り小冬文と砂まむを
 海酒にちまの孫さぬい
 知れてあれば借腹来り
 とそ所家の丁種さむ



● 見影へさんと
 心をつめて打ふ
 孝次が教へく換ふ云と
 引出さるるうらさ
 次も落々しく死ねぬ
 小僧小僧両色にうらさ
 考へるる利奈もあま
 乙の助次へてのさ
 格別小乙と助と愛し
 を乙と助のあはれ

● 小まゆせぬるあそ
 意決り指んど
 意のあまの毒を
 意ハ四と寧のま
 波を報してあはれ
 松とまうけぬと
 一とま狗を先工
 運ふを折とま
 己の助のあ
 森は彼紙入の
 己があまの
 紙に上ませ
 供ふのあま
 形の小乙と
 乙と助のあ

休む



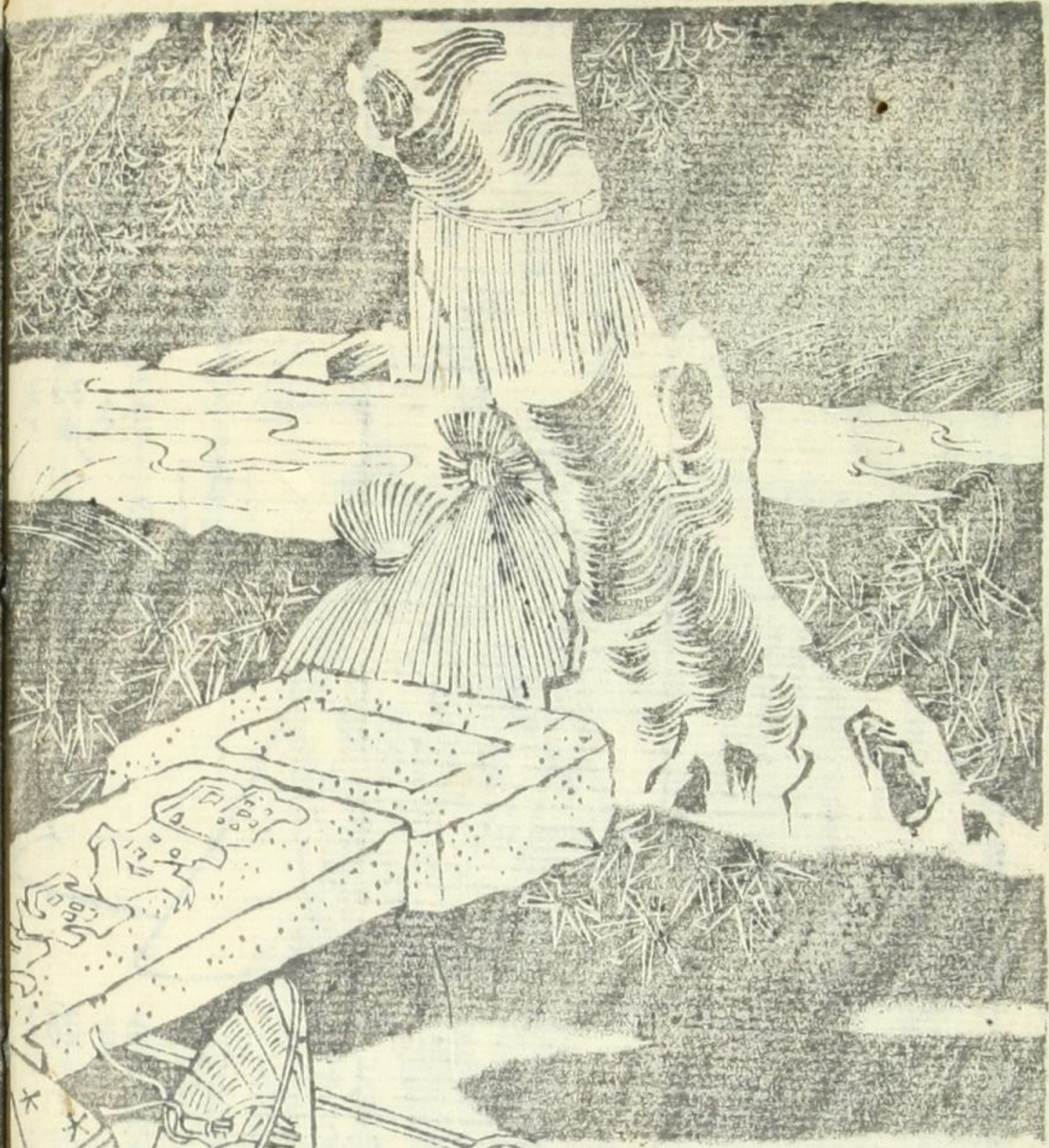
寺へ行くの密り
 村と出るを船と死にわが
 起すを母以小急ぎ寺と脱出で
 途中心奪決と信合一東海と

△島地は小島と
 船乗舟へ乗るが
 路の難いがある
 之を度へ入る
 月夜と海に
 年塚と心ゆると
 たる夜乃も海乃
 引入れれと不
 船乗舟草ひと
 船細程と那方
 此方と引と
 毛手塚小程も
 友とて
 休まると
 月もあ

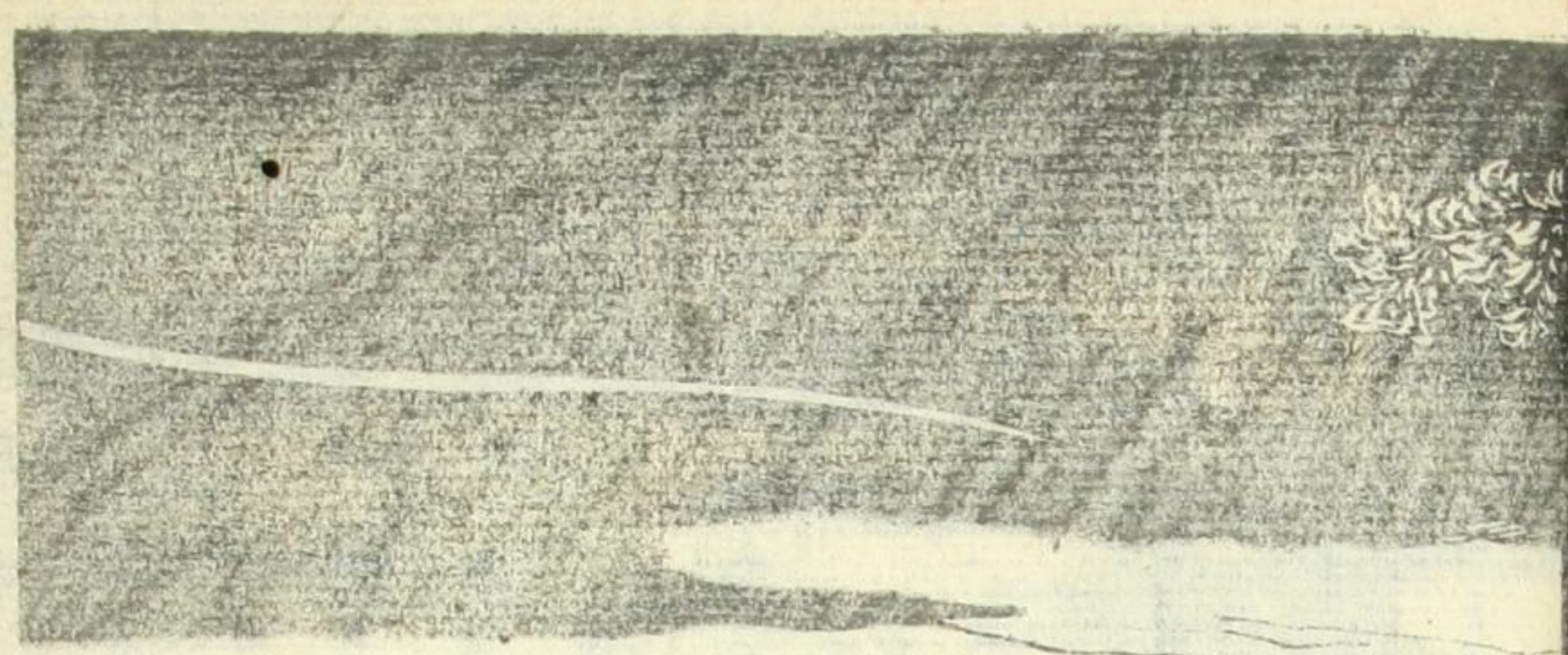


上らんと中山道と江戸と
 故の道取心と下と
 取す事力あると奪決
 工兵と選り
 三つと四つ
 上りと送る
 己の助が秋候と
 伝強支揚くあり
 物と多く喰散
 右の外の外小巻ひの
 かりの巻次も今
 持巻一日もよく方付んと

筋と性来の人の
 多れ事と心
 便宜と心
 今昔と心
 又も機合
 一里半
 郊地の路傍
 小島と
 面合則と
 横し例
 て腰とち
 うけ扱火小
 畑草と
 右の助と心
 己の巻と心
 くらんて巻と
 村の巻と心
 風下り
 心曲つ横と心



國多様也類業り
 とあるまじきもの
 自か目深不面と
 包とイヤ乙とまん
 夫が何れもあう
 うの糸が紫せそ
 あげをうと乙と助
 が後一早新と
 後とあうり後
 乙と助が
 乙と助が
 乙と助が



仕海
 たりと意次
 ハ本笑と
 乙と助が頭小
 解とを肉死せ
 さぬにさくと傍の工
 乙と助が頭小
 解とを肉死せ
 さぬにさくと傍の工
 乙と助が頭小
 解とを肉死せ
 さぬにさくと傍の工

芳川春傳閣本起泉發

川上行義復警奇談 二編	幻阿竹導聞書 三編	澤村田之助曙草紙 五編	坂東彦三倭一流 三編	白菅阿繁系顛末 三編	嶋田一郎梅雨日記 五編	其名し高橋毒婦之阿傳 東京奇聞 七編	色吉原安里系御福 三冊
出版人 綱島龜吉	編輯人 岡本勘造	新板物不致淨心	界平 松村屋	御所櫻梅松録 十五編	東京上野 花岡奇縁譚 三編	横濱上野	東京上野 閣本起泉發



河津新中

さるる帰しき音次の様多
冷水を浴びるるとあふるり小
煉とて焼てあふるり
早に後海の方へと逃出す

さるる女が仍違ひ
さぬとかけつるその
声七何と聞いや

さるる音次の生可
キヤツと一音俯伏
小例する折しも
高橋の構火か

アレーとゆひ
つ一の宮の
那地の方と



花あやめ

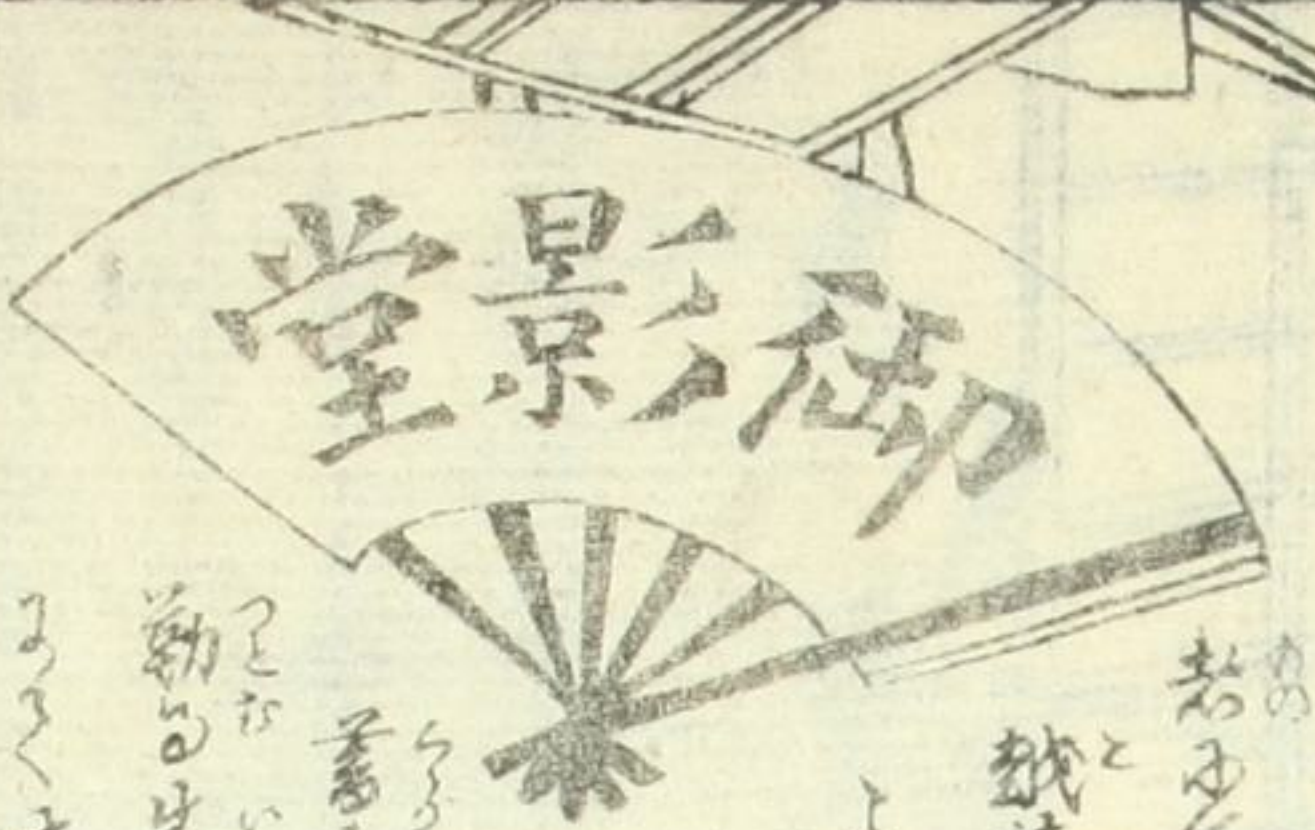
花あやめ

花あやめ

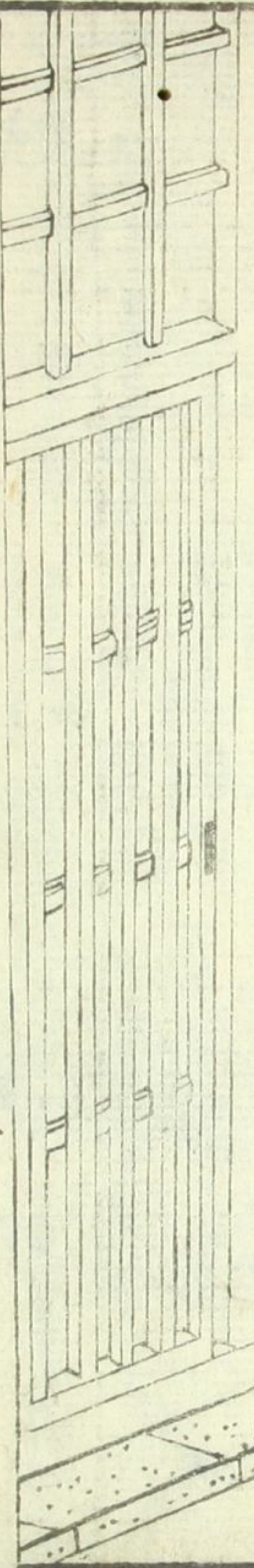
花あやめ



○其頃江戸の八重町不仕組岡野之九郎と云ふ
海津の川越藩の密書の小買物の用達を勤む
若くは何故か其の幸に十と云ふ
越せど定まる妻も多し家も幸
より下女と下男の外に一人の丁稚と
仕ふのも日々川越の屋敷へ出入り
所用と云ふて可なり豊うみ
若くも同屋敷の小納戸に
新の生釣針作との老の引立
よくは針作との引立を
若くは針作との引立を
若くは針作との引立を

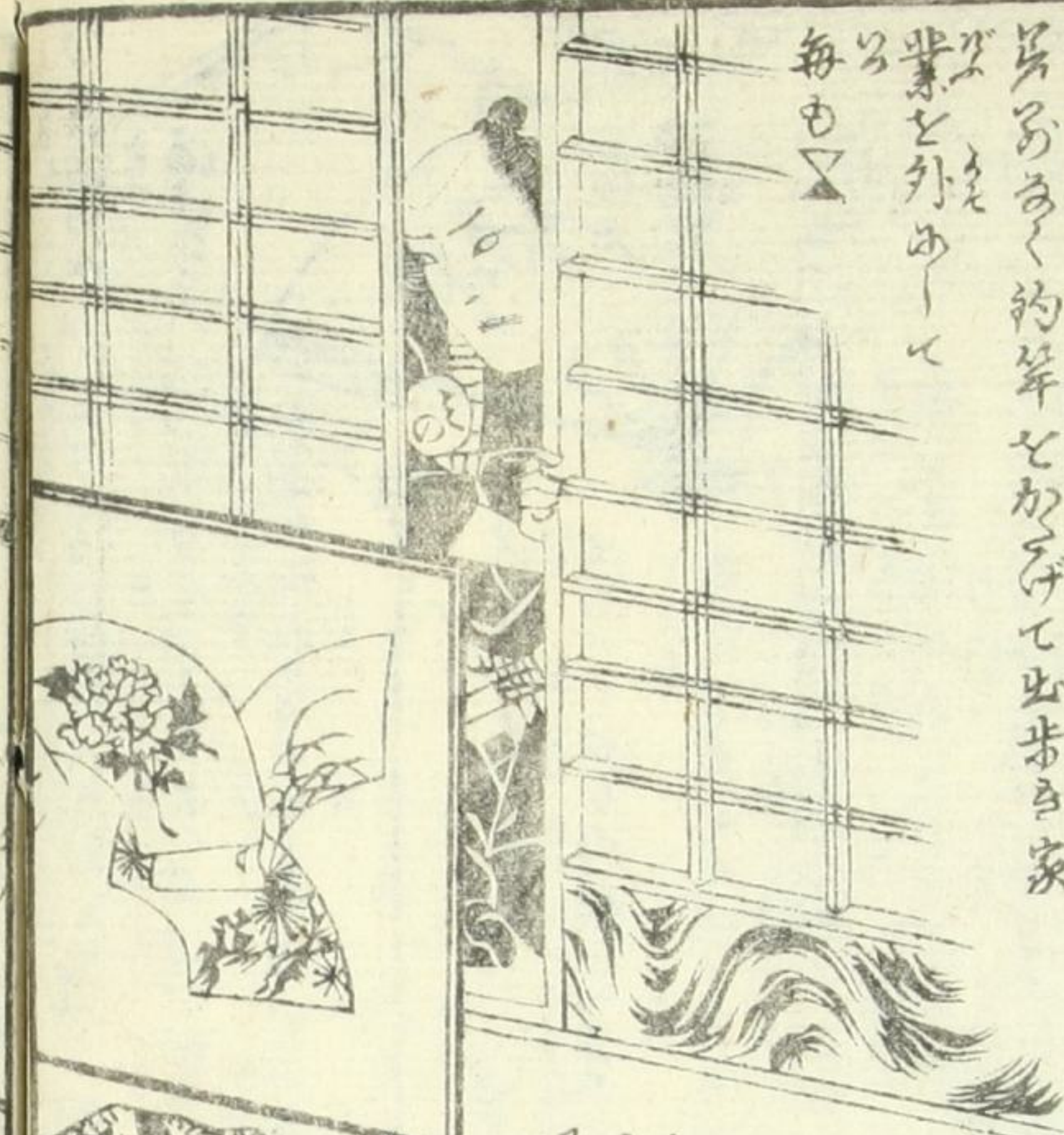


○其頃江戸の八重町不仕組岡野之九郎と云ふ
海津の川越藩の密書の小買物の用達を勤む
若くは何故か其の幸に十と云ふ
越せど定まる妻も多し家も幸
より下女と下男の外に一人の丁稚と
仕ふのも日々川越の屋敷へ出入り
所用と云ふて可なり豊うみ
若くも同屋敷の小納戸に
新の生釣針作との老の引立
よくは針作との引立を
若くは針作との引立を
若くは針作との引立を

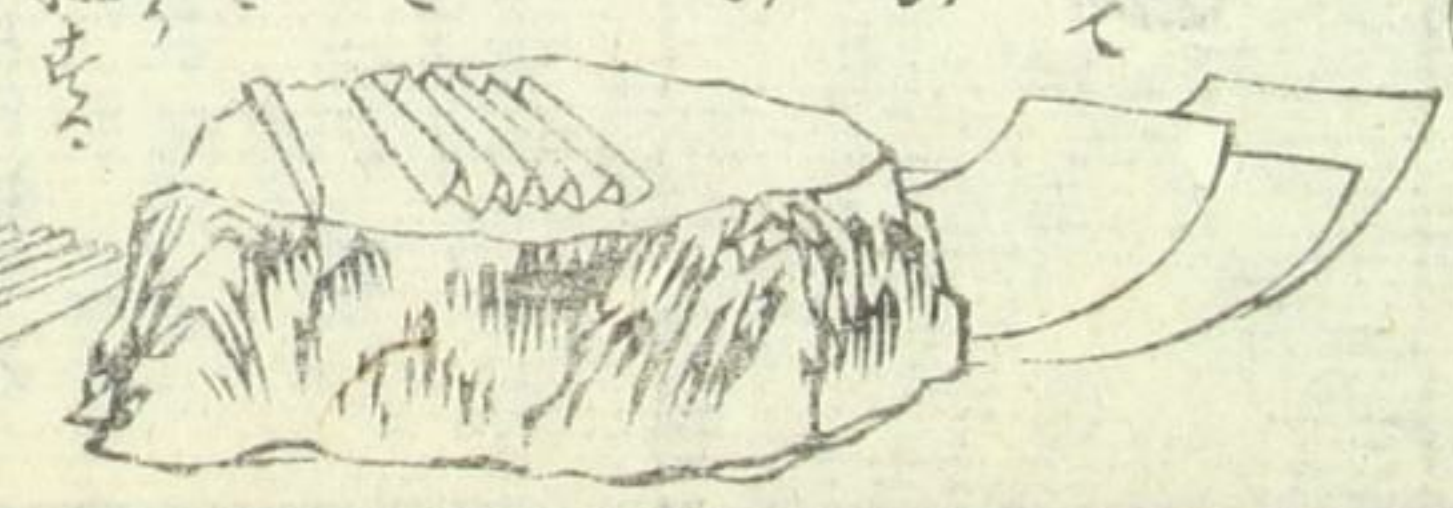


可染切下

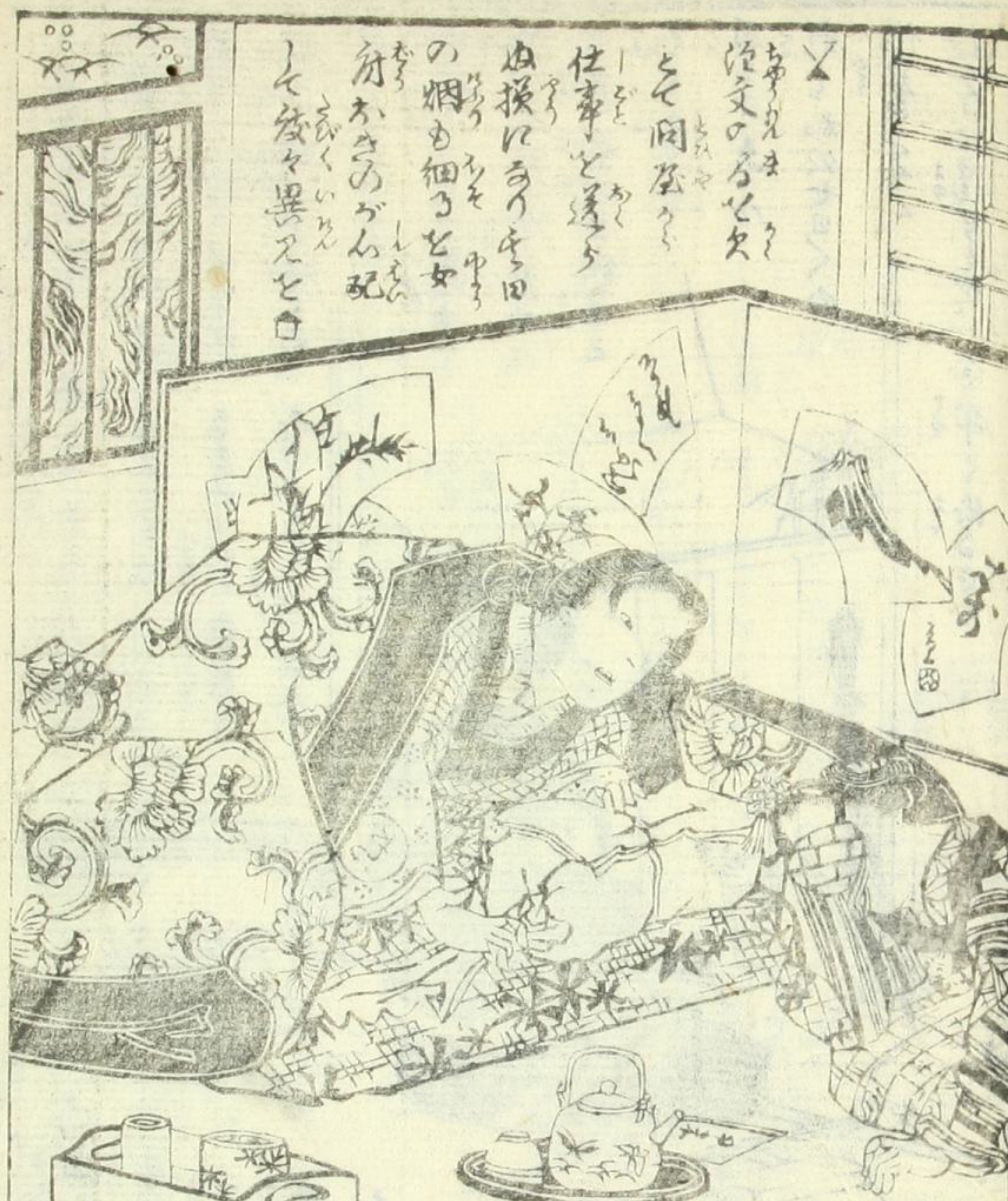
のき兼て元糸が懸念小せし
 白倉屋町は扇折を
 合せしが少く自昔ぬまぬまの
 後世と世岩戸屋才去米の長女なる才去米との
 活智多一の癖小約なる事と嗜と妻秋好夕の
 其あましく約筆をかぎて出歩る疾
 業を外ゆりて
 毎も



夢ひ其財十二小の娘の
 お繁と相あいにあはせく縁ひ
 ど女の細腕入のや海を契
 究とまのそ懐と昔小病んで
 願ひの母殿と
 一て少くつ仕事を送りて
 同座不義控と云傳
 衣袋細皮と妻代り
 夢ひ其財十二小の娘の
 お繁と相あいにあはせく縁ひ
 ど女の細腕入のや海を契
 究とまのそ懐と昔小病んで
 願ひの母殿と
 一て少くつ仕事を送りて
 同座不義控と云傳
 衣袋細皮と妻代り



ちり見ま
 活文のるど文
 とを同座
 仕事と送り
 由振にありや田
 の烟も細ると女
 肩あきのかん配
 して後々異えと口



ぬつぬ方去米が
 疾約にそまの
 言輪を承川神
 備せし小舟が
 暴風に覆る
 願ひを死せし
 妻の骸の石
 産まぬまぬ
 負若と隣り
 小佐む大工の
 乙く者との
 がえくひてら
 甲斐く

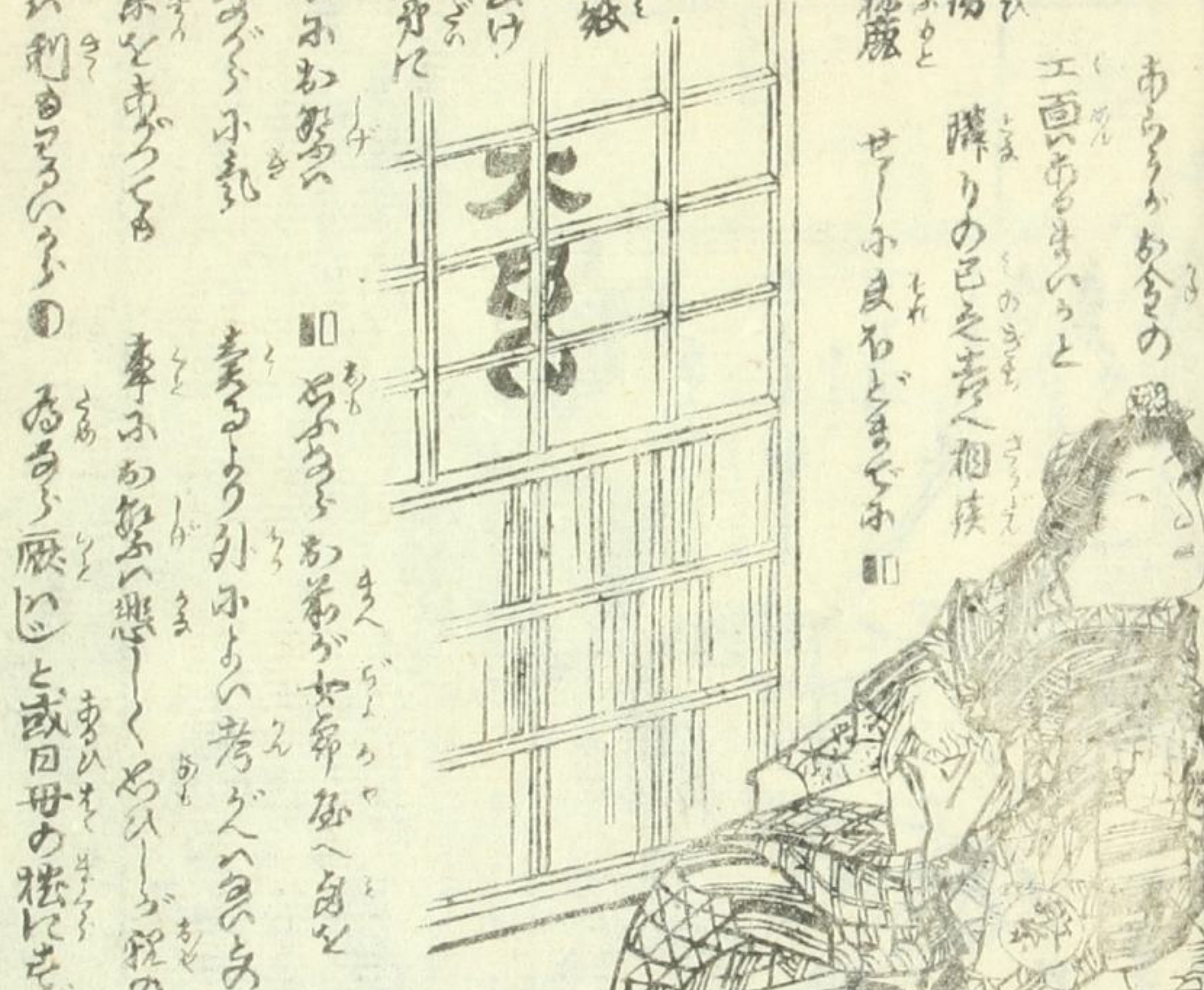
つぎ 寺の布絶々 ① 一旦近所の借銭を
 華式の入費と残らば きれいに漱くを安んじ
 持出して残る方々に なたるるを良菜と
 しき 親切の何う見ゆその あげとるがかりの

あることあらんが
 借銭かさむ自代お
 取らすまに
 ねもむれ七日の
 借銭さへん
 むろりに流せが



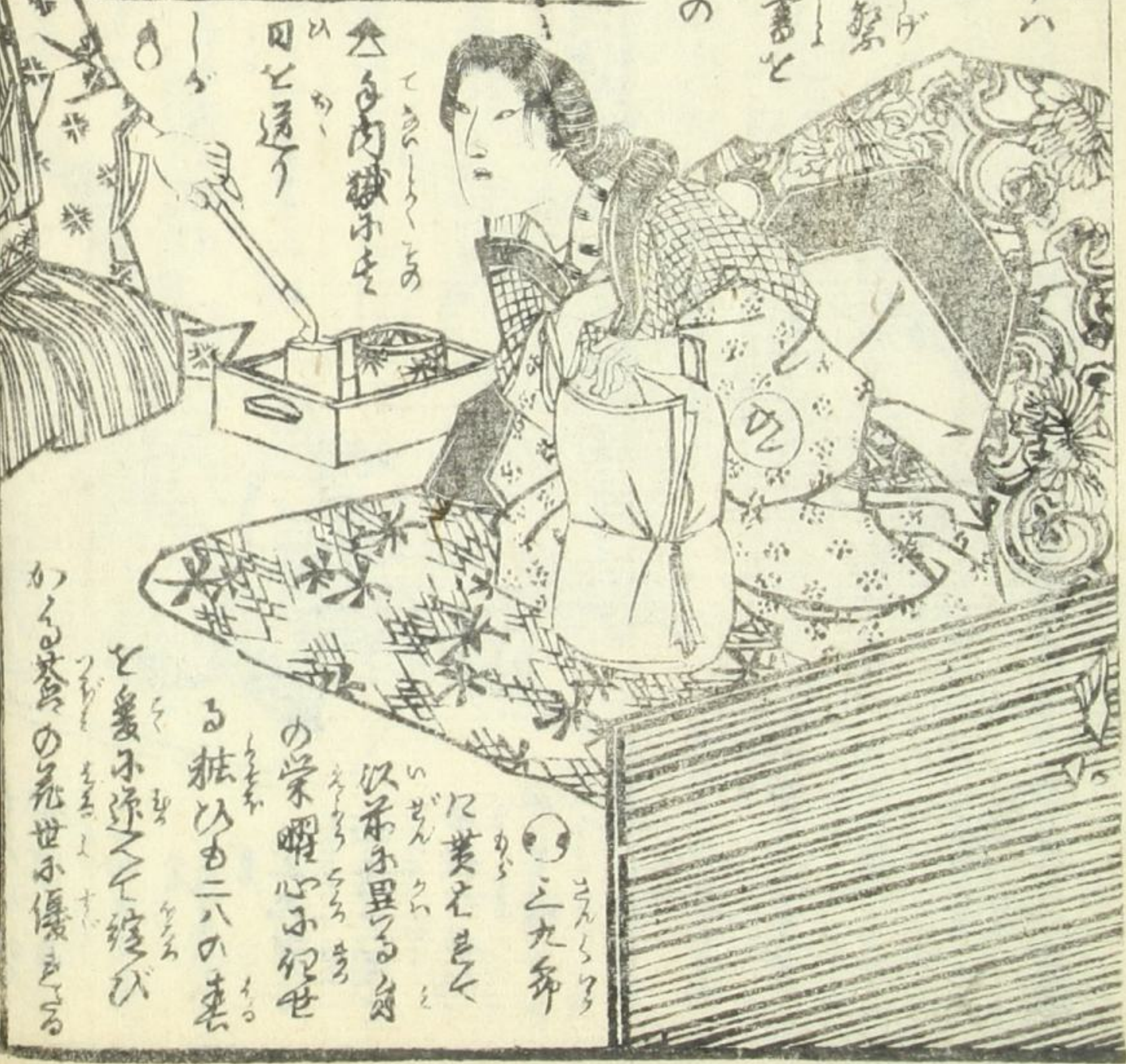
② 海から小舟を
 奏とと撥は後く
 はん根を母祝が
 推量りて共渡
 夏本立をあり
 揚る灯の花
 障！一声空
 小音づつ
 冥途の
 名らえ血と
 なく若一さ
 母子の性一の
 涙をとる
 ありりと
 年より一
 之九年が
 始終と関て
 不依にあひ
 形も懐き
 孝女と抱女に
 せんありまの
 金子と利遣る
 也我方へ書女
 小これと吐した
 母子の手ひ因

あつた近所の借銭
 取らすまに
 ねもむれ七日の
 借銭さへん
 むろりに流せが
 ③ 早く流るるで
 工面あるまはうと
 隣りの己之妻に相疾
 せし小良むとまふ



あつた近所の借銭
 取らすまに
 ねもむれ七日の
 借銭さへん
 むろりに流せが
 ③ 早く流るるで
 工面あるまはうと
 隣りの己之妻に相疾
 せし小良むとまふ
 せんありまの
 金子と利遣る
 也我方へ書女
 小これと吐した
 母子の手ひ因

甲遠不兼知一はれは九糸の
 見向入用ごの金子とあきのみ
 後一糸のたわとをまのくちか
 と昔女ふまろつとと一れの証書と
 受取り吉日と擧んで八官町の
 我家へ引取じ
 後の屢々若
 戸窓を清き
 づと脱切不世
 依して十方小
 茶店とを
 なる幼と



色敷と人の眺とをるの
 ちやとあふ心の弱まら
 とあていさくふ年以
 秘ぬ三九糸密ふお堅
 小娘想と心と擧げ
 と流石いそち
 あけてお中
 子餅小
 給ら
 折と小
 挑とかる
 とまとい知
 れど次へ

胸小車とまの
 昔昔が傾小敬
 のああまのあか病
 以丹以落らき三月むらり
 全快世へ是七と九糸のあき
 打春ひけ上い成たけ世
 可 紫 刀 下

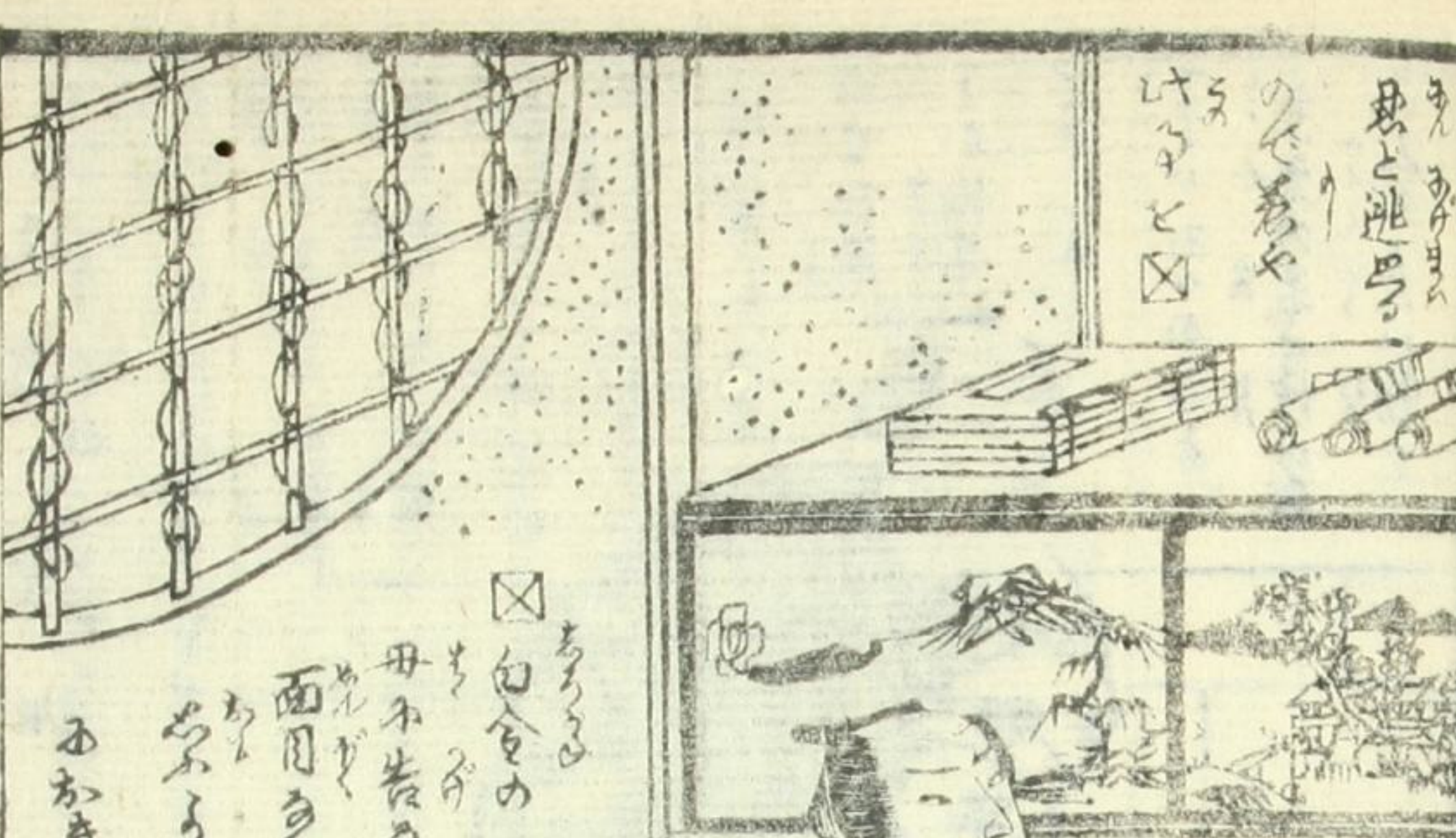


月ころ
 三九糸
 方めて
 あきめと
 疎とと極外
 みるあおあ暮らび



お察い感と嘆らぬありに
 瓜多すて未通娘の帯
 多うと後面まらむ
 人さぬとらひ
 おつげは

疎遠も扱ふ恥しく出
 入とせぬ扱は仕向てありて
 お察とび一写の内より外
 へ出さず扱ふありて
 扱ひたる扱前の身とまほ
 多と感しう繰しつとて入て
 るは後膝ま口後ろを全
 お察も絶情察令如何い
 せんとおと扱き造り後け
 一幸きと出笑の
 不義と踏むためあひ
 つまはいお出入を女の生
 物とて扱ひとて扱て



何と云ふさあふらへに
 出来ぬ事父の
 不は

結ひいと
 のまの父も
 敬るき再
 び扱と扱
 先方へ対
 一後尾云
 さまは由
 ありと
 扱ひと
 扱ひと

可察刃下

五

お察と逃
 ので着や
 ひらと

白合の
 丹不若多
 面用まのと
 赤より
 おおきのと

お察と父の二内身

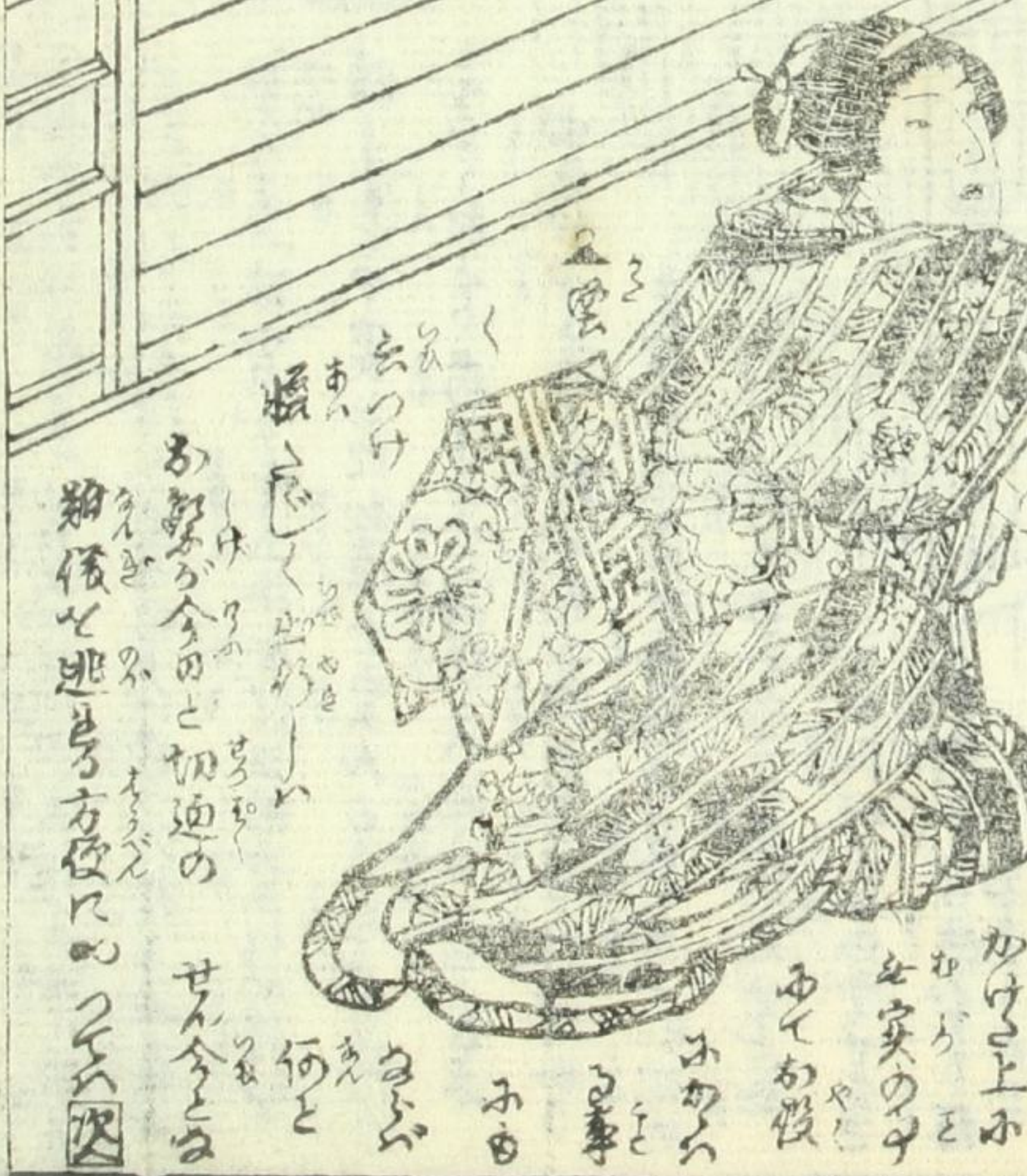
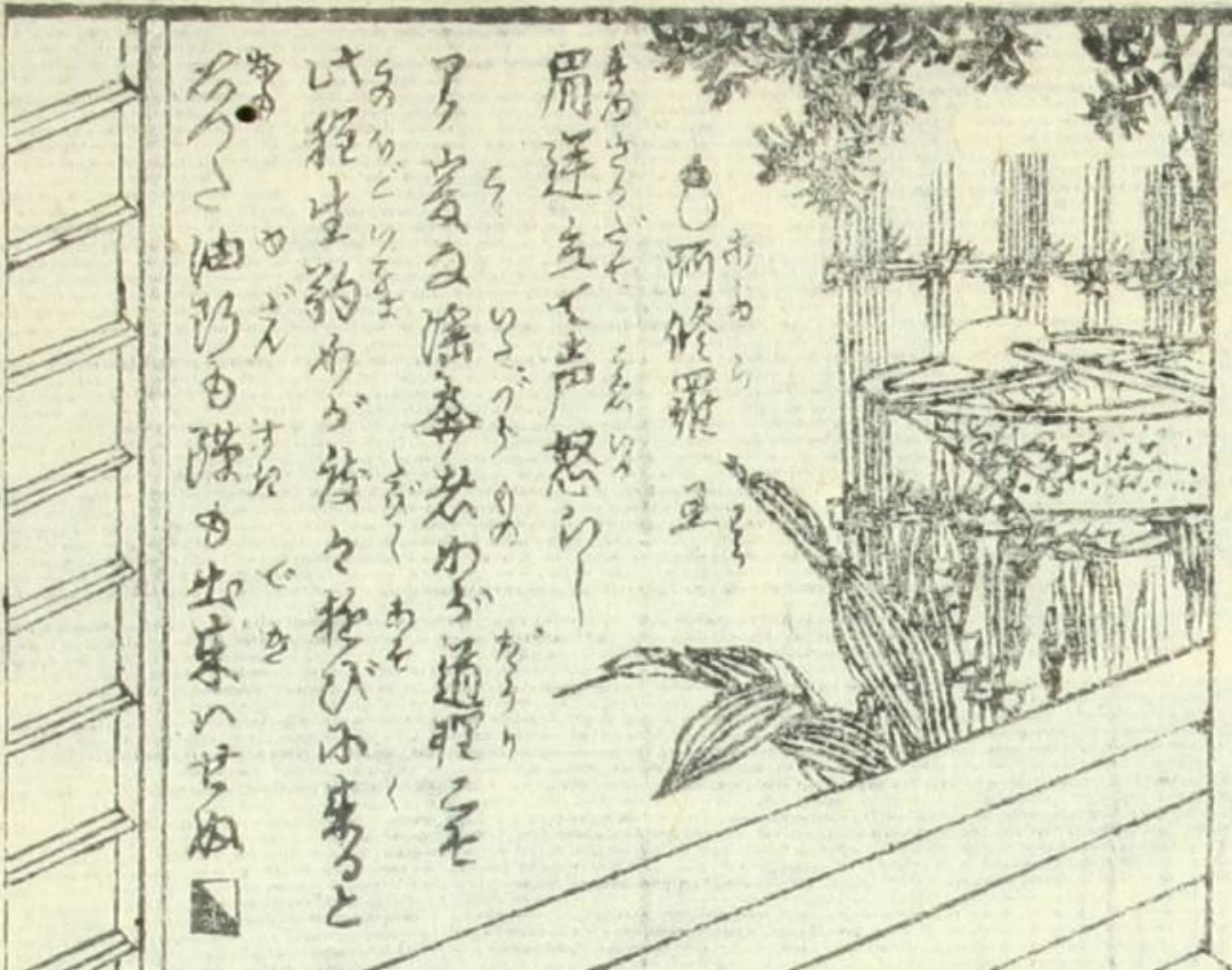
つぎ今日いそげとる抱て藤子
 先情をきめて返事とせよと
 池子と安をいとお察い
 態と御しそふ小敷
 未あられどう仰アて
 由る父のいふふ
 強うぬいお屋敷
 かしら
 とか納束
 とやし
 事があるおと
 云々のまごつらぬ
 小九九お初と



人もあられけ那き二才
 とく呆れぬと盛名の
 出入り留められてるモウ
 かなりぬ那奴の役と
 形はもろい藤衣と
 自づろつて突と
 女生約へ辰と
 ときえん
 けいふお察い
 今更な後海
 是るも怪もの
 色と由る辰とを
 云中へ何は
 台免てやられぬ
 け辰か癒ぬとこが
 急路の妨げと
 血相入て
 まはまそとく
 海流の盛名まで

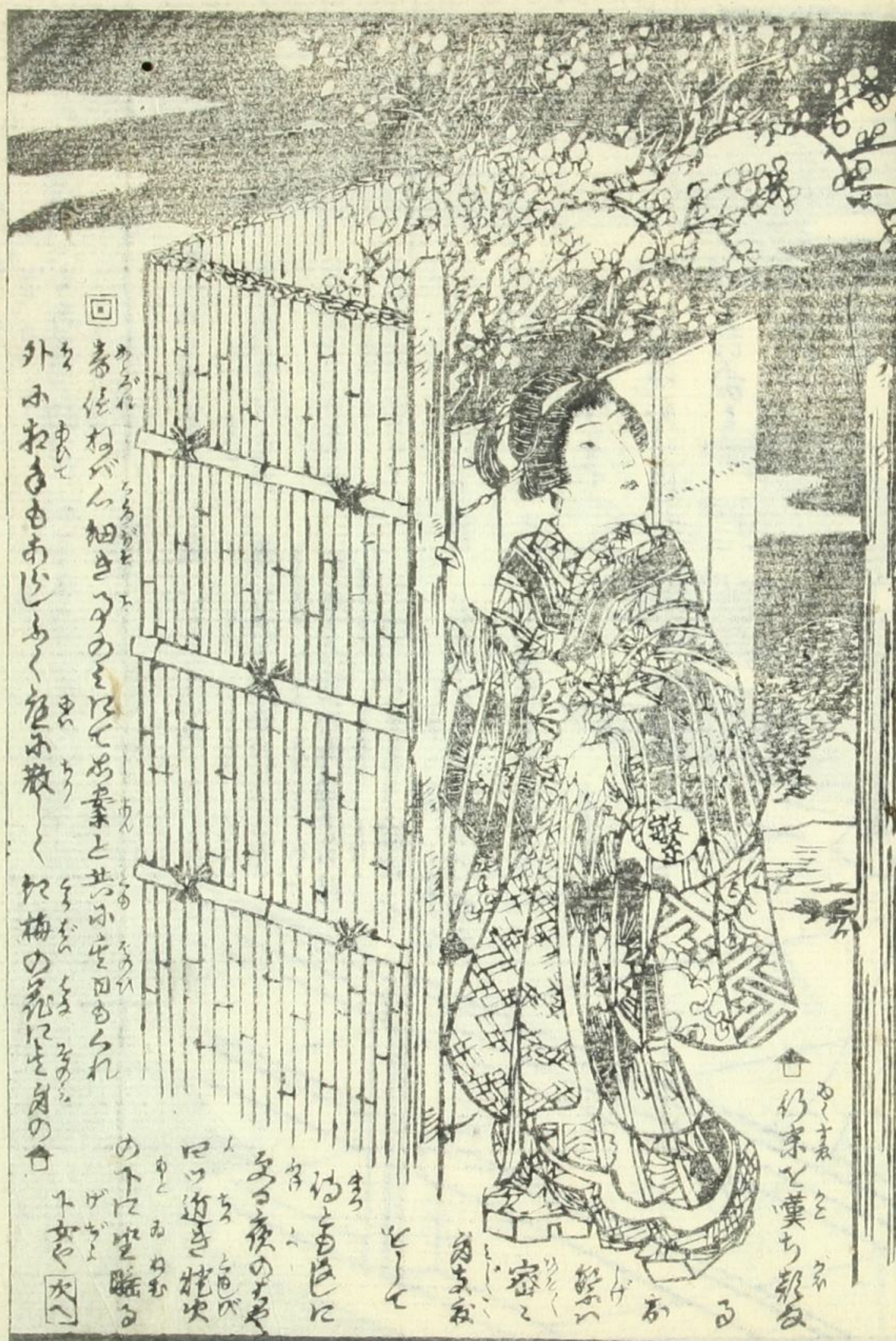
は誠うふ愛の款
 笑小集とほびてる

せいにしへ辰とに
 何て来るかふ必らだ
 お察と外へ出するを
 下女や中男に
 申達感と
 かけの上小
 女実の子
 中へお後
 小あふ
 事
 小由
 何と



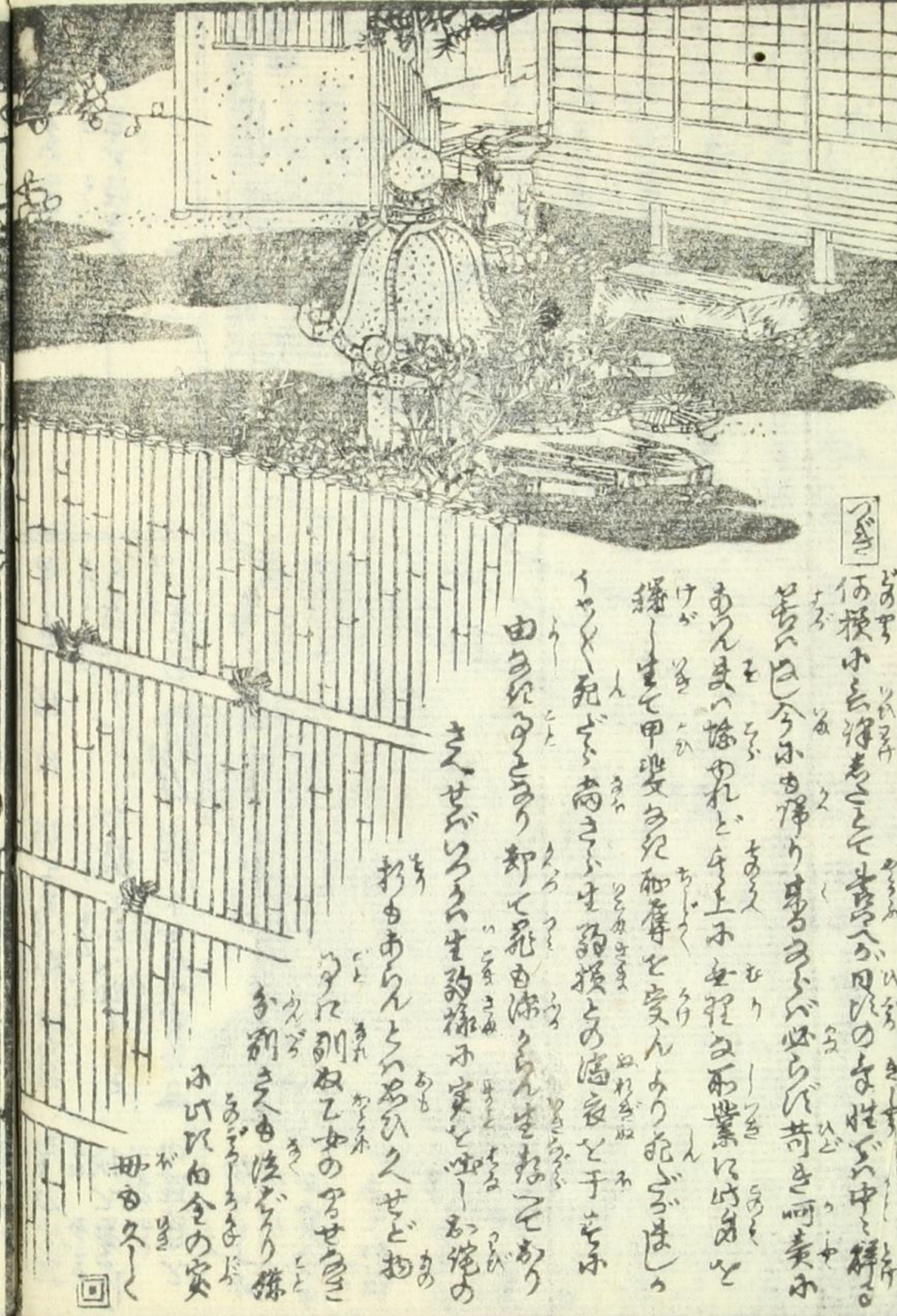
周遊立て声怒り
 又又又漢事おかか通程こそ
 け程生約わが後々極ひお察と
 油乃由隙由出来はせぬ

お察と今更と切迫の
 箱儀と逃身方便に
 せん今とふ
 可察
 下



可段下
 外小ねもあじふくを散く
 春は梅の花に生るの
 春は梅の花に生るの
 春は梅の花に生るの
 春は梅の花に生るの

夕末と嘆ち朝な
 夕末と嘆ち朝な
 夕末と嘆ち朝な
 夕末と嘆ち朝な



何様小長持をよそと書ふ日頃の女性の中へ解き
 昔は今日も降り来るさへ必らば苛き可貴小
 あんまへ梅われと生上小を程に而業はゆめと
 縁して甲斐多死和存と安んゆり能ふはし
 うと死を尚さ生路換との徳夜と于そ小
 由さゆりとり却て花も海とらん生ねとあり
 えさばらう生路換小安とやいお徳の
 形もあらんとおひえせとお
 夕に別ぬて女の言せさ
 夕に別ぬて女の言せさ
 夕に別ぬて女の言せさ
 夕に別ぬて女の言せさ

母も久しく
 母も久しく
 母も久しく
 母も久しく

つぎ下男の襟と何れか
今宵のらちの海邊を想

舞小のる花柄のきと生怪
庭のりげはみけとと云

橋と渡り花小折る二茶
町取より室の落暗き日法

町通りと連走り途中で
あつと息と死る仲時文

とちめえと通るる
とちめえと通るる

奥小あつと
とつ小のそ

まれば
まて

焦ちけ振さす
あつと

戻つて
あつと

今さ心付ておこ
あつと

お生駒の澤らば
あつと

戻つてえればは始末
あつと

そ後が主のあつと
あつと

蓋と怒り假令逃る由
あつと

女のはまか遠くへ走る
あつと

外小折る花柄の
あつと

まればは白金の母の
あつと



ふか
芝の大門晴
を本主の所門
前住来途終
遠く向ふ
次へ



つぎスルク

とまゝの

ゆゑと能

せむつき

透しと見え

へ徳田の女

新い愛り

小兄

へねど

由確らぬ

またと二九命

かか繁くと

心と知る声

△新い取と

えんくらふ

三九命の力限

りは全既引

立ての

の付

戻らんときま

先と捕へてお

○夜風と

防ぐ山屋

現巾小面を

色とたる

刑獄病

の一人の武

士が乃遠

ひさみよ

候さ

小次

小紋の尻

如きを通

いせ下と

送つてこれと

いひさる捕

女役を振松

以又廻りすと

海におお盛揚

の上で抱とめ

免して下さ

紙作絶命

後へお前へ

一生殺命

徹れと咬付

小瘡おあのみ

おのつ

おまげ

女役を振松

以又廻りすと

海におお盛揚

の上で抱とめ

免して下さ

紙作絶命

後へお前へ

阿彌陀佛下



010190516976

芳川春鹿岡本起泉綴

其名し高橋 毒婦之阿傳 東京奇聞 七編

色吉原安兵衛 待徠 三冊

鳴田一郎梅雨日記 五編

東京上野 花岡奇縁譚 三編

白草阿繁顛末 三編

御所櫻梅松録 十五編

坂東彦三倭一流 三編

界平 府藤栗毛 三編

澤村田之助曙草紙 五編

新板物不教浄心

幻阿竹尊聞書 三編

編輯人 岡本勘造

川上行義復警奇談 二編

出版人 綱一島 龍吉



御届明治十三年二月廿三日

花町区一番町六十一番地

編輯人 岡本勘造

